

## カール・マルクスの性癖

古 田 耕 作

ユークリッド幾何学を理解するためには、ユークリッドという人間の生活とか性格を知る必要はない。「キューリー夫人伝」はおもしろいが、キューリー夫人の科学における仕事を理解することとは無関係である。ところが、作家とか芸術家のしごとを研究するためには、その作家、芸術家の「人間」を知ることが、おおいに参考になるし、ときには不可缺である。これはマルクスを研究する場合にも、あてはまる。

おおざっぱに云えば、マルクスの「科学」の研究は、マルクスの「人間」を知らなくとも可能であるが、マルクスの「思想」を研究するためには、その「人間」を知らねばならない。しかもマルクスの場合には、その「思想」と「科学」とが密切にからまりあっている。したがってマルクスの「科学」を研究するためにも、マルクスの「人間」を研究すること、いいかえれば、マルクスの言動（とその背後にある心理的動機）にたいして、広義の「文学的な」アプローチを試みるものが不可缺である。

マルクスの「人間」を考察するときには当然必要であるはずの冷静で公平な態度、これが、とかく困難らしい。はじめから敵意のこもった色眼鏡については云う必要はあるまい。もうひとつの極端な態度、それはマルクス崇拜である。マルクス神社、アバタもエクボ。こうなると、マルクスの性格的欠陥、人間的な弱さ、これのマルクス「思想」への投影、といったものを、指摘したり推測したりすることも、一種のタブーとなる。こういう態度をとる人は、マルクスの「科学」を学んだつもりでも、その根本にあるマルクスの「批判精神」については、何ひとつ学んでいない。マルクス読みのマルクス知らず、これはごくありふれた現象である。

マルクスを研究するために、マルクスの「人間」を知る必要があること、そのためにマルクスの「非神話化」が必要であること、これはスターリン批判以後、とくにアクチュアルな意味をもちつづけている。スターリンはダメで、レーニンはやいのか。レーニンもダメで、レーニンの毒をローザ・ルクセンブルク（の大衆の自発性の評価と党内民主制）で中和せねばならぬのか。中国とソ連はどちらが正しいのか、どちらもダメなのか。あるいは、マルクスを始祖とあおぐ大小の政治集団が、それぞれ自己の「正統性」を誇称して、他をバカかキチガイのように、けなしている状況……。こうして、マルクス主義とは何か、マルクスとは何かという問題が緊急の課題となっている。

こういう課題にたいして、アルノルト・キュンツリの『カール・マルクス』（1966年出版<sup>①</sup>）は有益なヒントをあたえる。キュンツリは膨大な資料を駆使して、マルクスの「人間」を再構成し、さらにその「思想」、「科学」へと迫るのであるが、そのさいに、彼はフロイディズムを使用する。ただし、これにふくまれている形而上学的・宗教的思弁の部分は、できるだけ排除して、「人間」追求の方法として精神分析を使う。

もうひとつ。これによってマルクスの人間、思想、理論のゆがみも示されるが、いわゆる「西欧」の現状の社会体制を擁護することが目的ではない、とキュンツリは、わざわざ断

わっている。<sup>②</sup>

本稿はキュンツリの労作の紹介という機能をはたしつつ、いくつかの点においては、キュンツリの提供するデータを筆者の関心にもとづいて再構成したものである。なお、キュンツリは精神分析の専門用語を多用しているが、筆者としては、精神分析の専門家からみて不正確であろうとも、できるだけ「常識的」に納得できる線で叙述する。

ところで、マルクスはどのような人柄であったか。リープクネヒトの語る典型的なエピソードがある。「マルクスはチェスをしていて形勢が悪いと、ごきげん斜めになり、一局まけるたびにハツあたりした」。<sup>③</sup>ある晩リープクネヒトとチェスをしたが、「その翌朝、私が起きたばかりのところにドアがノックされ、はいつてきたのはレンヘン（マルクスの家政婦）だった。『マルクス夫人のお願いなのですが、晩にモール（マルクスのあだ名）とチェスをやらないでください——マルクスは敗けると、くやしくて我慢できないのです』。彼女の話では、マルクスの気嫌が悪くて、あんまり当り散らしたので、マルクス夫人もカンニン袋の緒が切れたそうである」。<sup>④</sup>

この話はほほえましい。わがままな殿さまのへボ将棋。落語のタネになりそうな話である。キュンツリはこの話をマルクス夫妻の間の波風のデータを示すついでに、小さく引証しているだけであるが、このエピソードはマルクスの人柄を照しだす重要なカギと見える。

このエピソードは何を示すか。まずマルクスの子供っぽさ。良くいえば純真で可愛らしいのだが、反面、悪い意味での子供っぽさ、つまりわがまま、自分勝手な、自己中心主義。そして感情の動きの未熟性。こういう子供っぽさは、実生活では、金銭問題を含めての、人間関係に対処するさいの稚拙さ（と冷たさ）と、さらにズボラにもつながっている。

つぎに示されるものは、子供っぽさの故に露骨に発揮される負けずぎらい、闘争好きである。これは破壊本能と、さらには批判精神と密切につながっている。

要するに、常識的にみてマルクスはカドの多い、<sup>あ</sup>灰汁の強い、イヤラシイ男で、エンゲルスと対照的である。エンゲルスは敵からみても味方からみても、スカットさわやかな性格で、実生活的にもオトナで、実務でも論文でもテキパキと処理し、しかも酒でも女性でも適度に風流を解し……といった調子である。イヤラシイ男とは、つきあわぬに越したことはない。しかしマルクスの「科学」と「思想」を尊重するもの、よりよく見きわめたいものは、マルクスの「人間」ともつきあわねばならぬ。マルクスの「思想」の電圧の高さは——その鋭さも、その誇張や歪みも——その「人間」と切っても切れぬ関係にあるのだ。したがってマルクスの「人間」のイヤラシさを非難するのが目的でないことは云うまでもあるまい。以下、マルクスの人柄を、いくつかの側面から眺めて見よう。

闘争的性格。毒舌の名人というか悪口癖というか、口の悪いことでもマルクスは一流である。永年、革命運動史上の諸人物を研究してきた E. H. カーによると「マルクスは罵倒することに病的な情熱をもっていた」。<sup>⑤</sup>マルクスの毒舌は、大量にのこされているエンゲルスへの手紙等にも、ふんだんにバラまかれているが、『ドイツ・イデオロギー』、『亡命者偉人伝』、『フォークト氏』等も毒舌の見本といえる。『ドイツ・イデオロギー』にはエンゲルスも関係しているが、この本はマルクス主義哲学の基本が明確に意識されたという点で、歴史的に重要ではあっても、そういう良いところは量的にはわずかなもので、読者としては毒舌の行列で、うんざりする。マルクスの毒舌によってバカかキチガイのように描きだされてい

る諸人物が、じっさいはバカでもキチガイでもないことは、マルクスにも読者にも分りきっている。マルクスの毒舌による人物批評、思想批評はマルクスのストレス解消のためには役立つであろうが、その人物、その思想の「客観的な」報告としては落第である。マルクスの毒舌はデモニーシユである。毒舌というものは平穩無事な人間関係に香辛料としての効能もあり、たがいに毒舌をろうすることによって親近感を再確認することなども、よくあることだ。だがマルクスの毒舌はそんななまやさしいものでない。そこには、積りに積った怨念と怒り、いろいろなコンプレックス、人間にたいする憎悪と侮蔑、こういうにおいがつきまとっている。『亡命者偉人伝』もひどいものだ。亡命せざるをえないということは、なまやさしいことではなく、それぞれのきびしい信念と行動があるはずなのに、マルクスの毒舌にかかると、マルクス一派以外の反体制運動家は、たいてい虚栄心、利己心などに駆りたてられて妄動していることになる。これはマルクスの悪癖のひとつで、マルクスを師と仰ぐ現代の反体制運動家のなかにも、こういう面でのマルクスの悪影響がある。不必要な、グロテスクな罵倒語によるレッテル貼りでも、同様である。お師匠さまの「理論」を学習するのは困難だが、お師匠さまの悪い癖を見ならうのは容易なのだろう。キュンツリが『亡命者偉人伝』から選びだした模範的な文章を眺めてみよう。模範的——ただし良い意味で、かつ悪い意味で。これは「政治的宣伝」の文章である。その目的には十分以上に役立っている。ペンは剣となり剣よりも鋭どかった。しかし、マルクスは、こういう亡命者の絶滅を慾したのか。こういう亡命者が大英帝国の支配層やプロイセンの権力者よりも憎かったのか。少し長いが引用する。

「われわれはここでロンドン在住『亡命者団』にぶつかる。すなわちフランクフルト議会、ベルリン国民議会と下院の元議員たち、バーデン戦役の諸氏、ドイツ国憲法喜劇の巨人たち、読者のいない文学者、民主主義クラブや民主主義大会の大言家、第12流の新聞記者その他の寄せ集めがそれである。

1848年のドイツの偉人たちは、『暴君』の勝利が彼らを安全なところにおき、外国へ追っばらい、殉教者および聖者にしたとき、まさにみすばらしい最後をとげようとするところであった。反革命が彼らを救った。大陸の政治の発展は、彼らの多くの者をロンドンに送り、こうしてロンドンが彼らのヨーロッパ中心点になった。事態がこうであったから、これらの世界解放者の存在を毎日あらためて公衆の記憶に呼び戻すためには、なにごとかが起こらなければならない、なにごとかをおこなわなければならないことは、自明であった。これらの権力者の関与がなくとも世界史は進行するといった外観は、ぜひとも妨げなければならない。これら人間の屑が、自己自身の無力のため、また現在の状況のために、なにか実際的なことをおこなうことができなければできないほど、それだけ彼らは熱心にあの無益なえせ活動をおこなわなければならない。その想像上の行動、想像上の諸党派、想像上の闘争、想像上の利害が、参加者によってひどくはでに吹聴されている。彼らが現実新しい革命をもたらすのに無力であればあるほど、それだけ多く彼らは心のなかで、未来に起こるかもしれないことを割引し、あらかじめ地位を分配し、予想される権力享有の楽しみにふけらざるをえないのである。このもったいぶった活動性が現われてくる形態は、偉人の相互保険会社と将来の政府の地位の相互保障である<sup>⑧</sup>。

マルクスの頭の良さ、回転の早さが、その闘争癖、攻撃性、「破壊衝動」と結合して 독특한文章がうまれる。たとえば『L・A・ブランキの乾杯の辞のドイツ語訳へのまえがき』の冒頭。「ヨーロッパの社会民主主義者どもの、いわゆる中央委員会セントラルなるもの、これは実際にはヨーロッパの主要なやじうまどもの委員会のひとつに過ぎないが、何人かのこういう<sup>⑨</sup>、あ

われむべき人民欺瞞者が、ヴィリヒ、シャッパーその他の諸氏の司会で、ロンドンで二月革命1周年記念を祝った。感傷的な空文句社会主義の代表者であるルイ・ブランは、人民を裏切ったもう1人の裏切者であるルドルユ＝ロランにたいする陰謀から、二流の僭称者たちのこの徒党にくわわった。一」。

クソ、クソつたれ、クソ野郎という意味のシャイセ(Scheiße)という単語はマルクスの口ぐせであるが、マルクスの毒舌には排泄物の香りさえまじる。『フォークト氏』の若干の章はダンテからの引用で始められ、または締めくくられる。マルクスは「神曲」を暗誦していたという。それは結構だ。しかし引用されるのは排泄物の話である。たとえば第3章の終りの文章。『「硫黄団」から「退職大臣」にいたるまでのフォークトのシュティーバーふうの(秘密警察の)経歴物語全体を読めば、彼がダンテのなかで言われている次のような種類の名歌手であることが判明する。』Ed egli avea fatto del cul trombetta 《(ソシテ、彼ハオシリヲらっぱニシタ)》<sup>⑩</sup>次の章の始まり。「さて、この『角のとれた人物』は《吞ミコンダモノヲくソトスル、イヤラシイ袋》から、さらに何を引きだすのか》<sup>⑪</sup>そして次の章の始まり。「私ハ男ヲミタ、頭ハうんこデベトベトデ」<sup>⑫</sup>マルクスはフォークト氏の頭にペダンティックな糞尿を注ぐのである。キュンツリの言うようにフランソワ・ヴィヨンも顔負けである。

ところでチェホフの『可愛い女』ではないが、マルクスの奥方イエニー・マルクスも、コミニズム、ユダヤ嫌い(後述)だけではなく、口の悪さでも亭主の感化を受けたいらしい。名門の娘、トリールでいちばんのお嬢さんが、次のようなはしたない言葉使いをするようになるのだ。たとえば1850年12月19日付、エンゲルスへの手紙。「……ゴロツキのシューベルトは……(中略)……とんまなナウトは……(中略)……下劣な一味に……」<sup>⑬</sup>。

マルクスに接した同時代人の提供するデータを見よう。まずアルノルト・ルーゲ。マルクスとケンカ分れた、かつての親友は26才のマルクスについて書く。「彼はいつも何らかの憎悪にとりつかれていた。そして私のことが彼の頭に残っているかぎり、彼は私を誹謗せずには何もかけなかった」<sup>⑭</sup>つぎにアウグスト・ベーベルとベルンシュタインのデータ。両者ともに政治路線における「偏向」をマルクスから批判されて、1880年ごろ、お説教をしてもらい(意見調整のため)にロンドンのマルクスを訪問したのだが、このことによって、マルクスにかんする世評と個人的印象にかんしてこのデータのもつ資料としての価値が減るわけではない。ベーベルによると、「このとき私は、そのころひどく意地悪の人間嫌いだと、どこでも評判のわなかったマルクスが、どんなに情愛をこめてやさしく2人の孫たちとあそぶことができるか、またこの孫たちがどんなに愛情をこめておじいさんにすがりつくかを見て、じつに気持よくおどろいたのであった」<sup>⑮</sup>引用の狙いは前半にある。ベルンシュタインによると、「私が想像していたのとはまったく反対に、彼は家長らしく落ち着いて練れた口調で話をした。私は、もちろん多くは敵対者たちの描いたところによって、相当気むずかしく、非常に神経質な老紳士と近づきになることだろうと予想していたのだが、いま対面しているのは、その黒い瞳からは友情がほほえみかけ、その言葉には優しさがあふれている白髪の人であった。2、3日たつて、マルクスが私の想像とはまるでちがっていたので驚いたと、エンゲルスに告げると、彼は、『さあね、モールはいまごろはもうカンカンに怒っているかもしれないよ』と言った。私はまもなくそれを見る機会をもつことになった。だが、まちがった断定をすることのないようにつけくわえておきたいのだが、その立腹のたねとなったのは、われわれが話題にして、私が弁護しようとした、ある第三者の書物だったのである」<sup>⑯</sup>ベルンシュタインにたいして示された愛憎の急変は、かつてブルーノ・パウアーにたいして、アル

ノルト・ルーゲにたいして示された。プロレタリアを神化しておきながら、突然、そのプロレタリアに侮蔑の言葉を投げつけたりもする<sup>⑮</sup>。こういう感情の急変、ヒステリックな怒り方、アンビバレントな言動をキュンツリはローベルト・ハイスの専門語を使いながら精神分析的に解明しているが、これは省略する<sup>⑯</sup>。要するにマルクスじいさんは、世評では、あつかいにくいイジワルじいさんであった。そして、この世評は、たんなる中傷ではなかった。「いつも何らかの憎悪にとりつかれている」青年からイジワルじいさんまでの中間に『亡命者偉人伝』等を置いてみれば、マルクスの獨特の闘争的性格は一目瞭然であろう。

闘争的性格を示す別の面からのデータもある。マルクスの著作を概観すれば、すぐに分ることだが、客観的な理論的な著作では、ひどい遅筆であり、たいてい未完成のトルソを残している。反対に他人を批判し攻撃する論文となると不思議にはかどるのだ。キュンツリによれば、「学位論文がイェナ大学に提出される程度に書きあげられるまでの何という大骨折り。しかもこの論文は断片のままであった。ルーゲの『アネクドータ』のために書いたキリスト教芸術にかんする大部の論文は未完成のまま放置され、印刷されなかった。1844年の『経済学哲学手稿』も同じ。『政治経済学批判』も未完成で、15年の後に第1書だけが印刷された。『賃労働と資本』も未完成で、一部分だけが印刷された。『フランスにおける階級闘争』も同じ。『資本論』も同じ……(中略)……腕も足もないギリシャのトルソのようなもので、大なり小なり専門的な熟練者、研究者、愛好家によって組み立てられる。マルクスが完成して残したものは、『聖家族』、『ドイツ・イデオロギー』、『亡命偉人伝』、『フォークト氏』のような本質的に論争的なものか、または『哲学の貧困』、『ルイ・ナポレオンのブリュメール18日』、『ゴータ綱領批判』のように、同時代の人間や事件にたいする、より短い、なかば論争的な対決であるか、または『共産党宣言』のように、直接の働きかけが目的で、科学性を求めない煽動的な著作とパンフレットである<sup>⑰</sup>」。

「科学」的な論文のときの遅筆と未完成の原因はマルクスが、あまりにも完璧を求めたせいでもあるが<sup>⑱</sup>、彼が闘争癖によって駆り立てられて、主目標でないことからのために時間とエネルギーを浪費したことも見のがせない。後者の例を示そう。1844年マルクスの頭に、後年エンゲルスが史的唯物論と名づけた思想の輪郭ができた。彼はこの思想を1冊の本にまとめようとした。これをきいたエンゲルスは喜んで、早く書け、少々の欠点なんか構わない、とにかく発表することが肝腎だとせきたてた<sup>⑲</sup>。しかし執筆は進まない。その間にエンゲルスはグルムシュタットのレスケ書店と交渉して、1845年2月には出版契約が結ばれ、マルクスは1500フランの前渡金を受けとる。史的唯物論の書、これはマルクスにとって「天命」ともいうべき事業であり、何をおいても書きあげるべきであった。しかもパリ生活の経済的裏づけであったはずのルーゲと共同の『獨仏評論』が行きづまって、マルクスは生活費に困っていたから、彼は経済的理由からも、執筆に努力すべきだった。それなのに、この本は結局、書きあげられず、彼の死後50年たってから『経済学哲学手稿』の第三手稿として断片のまま出版されることになる。その主たる原因は彼の闘争癖である。まずルーゲ攻撃。パリの亡命ドイツ人の小さな雑誌『フォルヴェルツ』に、シュレージエンの織物工の蜂起を論じたルーゲの小論文が載った。そのいくつかの論点がマルクスの頭にきた。ルーゲをやっつける絶好のチャンス。『「プロイセン王と社会改革。あるプロイセン人による」という論文への批判的注釈』ができた。はじめて革命の理論が打ちだされたこの16頁の論文は、じつにすらすらと完成された。論争の書、つまり論敵にたいする破壊衝動によって推進される仕事は、容易に完成される。「そして彼の哲学的経済学的政治的な根本思想は、体系的または歴史的な叙述の形ではなく、まず――そ

の後も多くは——みじかい断片として、論争の毒矢にくくりつけられて発表されたのである」。<sup>④</sup>

このルーゲ攻撃は、時間の浪費という点では、大したことはなかった。つぎはバウアー批判。かつての親友、3年前マルクスをボン大学に就職させようとしたバウアーは、『アルゲマイネ・リテラトゥール・ツァイトウング』を出していた。影響力のない小さな新聞で、1年もたたないうちに1844年10月につぶれた。つぶれる1箇月前、エンゲルスはパリでマルクスからこの新聞を批判する計画をきいた。エンゲルスも同意して、さっそく16頁ばかりで書きおわった。エンゲルスはマルクスといっしょに小さなパンフレットを作るつもりだった。エンゲルスが故郷のバルメンへ行き、マルクスへ早く経済学の本を完成せよと忠告しようとしていたところに、マルクスから手紙がきた。エンゲルスはあきれた。マルクスはバウアー批判に夢中になっていたのだ。「革命理論をもちこんだ経済学」の本など、ほったらかして彼は攻撃の喜びに陶醉していたのだ。エンゲルスの16頁にマルクスの200頁以上を加えて『聖家族、または批判的批判の批判』ができた。エンゲルスは不愉快だった、こんな小敵にたいして、こんな巨大な力の浪費。しかし、マルクスは闘争癖によって無我夢中で駆りたてられたのであって、何ともしかたがなかった。内容は大部分が愚劣な些事で、マルクスの「思想」と「科学」は、ところどころに散在しているだけである。しかし皮肉にも、この本はマルクスとエンゲルスとの処女著作となって1845年2月、フランクフルト・アム・マインから出版され、1000フランの稿料が渡された。だがパリから追放されてブリュッセルに移ってからも、マルクスの経済学の本ははかどらず、1846年には、あちこちから金策してレスケ書店に前渡し金1500フランを返す破目になった。これは金だけの問題ではなかった。マルクスは知人にたいして、この本が完成しているかのごとく思わせていたのである。たとえば出版契約破棄の直前のアネンコフへの手紙。「私はこの手紙といっしょに経済学にかんする私の本を、あなたに送りたいかった。しかし、いままでのところ、この本を印刷させることができなかった」。<sup>⑤</sup>マルクスはヌケヌケとウソをついている。

さて、つぎは『ドイツ・イデオロギー』。ヘーゲル左派を束にしての大闘争、したがって『聖家族』よりも更に論争的で更に読みにくい。しかし「以前の哲学的良心と手を切り」、  
「自己了解」をする目的ははたした、かつ、闘争癖のストレス解消には、一時的にせよ役立った。つぎはブルードン批判の『哲学の貧困』。キュンツリによれば「論争性はより少なく、理論的な中味はずっと多い。この本ではマルクスは稿料を貰うどころか、逆に印刷費を出さねばならなかった」。<sup>⑥</sup>エンゲルスがせきたてたマルクスの経済学の本は、内容的には、こういう論争の本のあちこちに、断片的に流れこんだわけであるが、まとまった本としては、けっきょくお流れになってしまったのである。未完成の原因は彼の闘争癖であるが、これにくわえてブリュッセルでの政治活動の多忙も考えるべきだろう。「労働者通信委員会」、「ドイツ労働者協会」、「義人同盟」（その一部分が「共産主義者同盟」へ発展的解消）ならびに『新ライン新聞』等の2月革命にともなう活動があった。この政治活動に多大の時間とエネルギーを捧げたことはたしかである。しかしキュンツリの提出する小さな疑問にも耳をかたむけないわけにはゆかないだろう。経済学の本をかくこと、プロレタリア解放のための、世界を変革するための理論的武器を打ちだすこと、これも重要な実践活動ではないのか、と。<sup>⑦</sup>

つぎにマルクスの子供っぽさ。子供の無邪気とか天真爛漫を裏からみると、子供のわがまま、自分勝手、自己中心主義、したがって、自己以外の人間にたいする思いやりの無さ、つまり心の冷たさ（感情の未発達）になる。さらに実生活の処理にかんして、投げやりなこと

にもつながる。マルクスのこういう性癖をしめすデータを並べてみよう。

マルクスは悪筆であった。キュンツリによると、悪筆は自己中心主義的性格のあらわれである。大学生になったばかりのマルクスにたいして、父親が、その筆不精をたしなめた手紙のなかで、お前の字は「苦心しないと読めない」とこぼしている。悪筆は一生つづいたらしい。妻のイエニー・マルクスは亭主の原稿の大部分を清書せねばならなかった。<sup>⑤</sup>またロンドンでの窮乏時代、オランダにいるいとこの弁護士アウグスト・フィリップスの世話で、鉄道に就職しようとしたことがある。パンのための就職、こういうことにマルクスが乗り気になったのは一生に1度のことであるが、クーゲルマンへの手紙。「私は『實際家』(Praktiker)になる決心さえした。そして来年の始めには、ある鉄道の事務所にはいる予定だった。幸か不幸か知らないが、私の悪筆が、私の就職できなかつた原因だった」。<sup>⑥</sup>またマルクスの死後、『資本論』の第2巻と第3巻とを、マルクスの集めた材料を使ってエンゲルスが書き進めてゆく、その苦勞をもらしたベーベルへの手紙の一節。「そのさいに、まったく私だけにしか——それも苦心しないと——読めない筆蹟」。<sup>⑦</sup>

はじめて親もとをはなれてボンの大学へ行ったマルクスへ、父の最初の手紙。「……お前が去ってから3週間以上すぎた。それなのに お前から何の便りもない。お前は母が苦勞性なのを知っているはずなのに、この途方もない投げやりぶり。お前は多くの良い性質をもっているのだが、それにもかかわらず、お前の心の中ではエゴイズムが優勢なのではないかという私の心配が、残念ながら裏づけられることになる。母はこの手紙のことを何も知らない。私は彼女の心配をふやしたくないのだ。しかしくりかえすが、お前は無責任だった」。<sup>⑧</sup>近親者にたいする責任感の弱さ、ひとの身になって考えてやり感じてやる思いやりの無さ、この性癖からマルクスは一生のがれられなかった。べつの手紙で父はかく。「お前は近親者の幸福をふやそうという気があるのか」。<sup>⑨</sup>あるいは、「私は、お前が自己保存に必要な程度以上にエゴイズムにとらえられている、という想いを捨てきれない」。<sup>⑩</sup>キュンツリによると、父親のいうエゴイズムとは、いわゆるエゴイズムの意味ならびに、エゴ・セントリズム(自己中心主義)という意味であり、ある程度の自己中心的態度は青年期ならば必然的であるが、マルクスの場合には、どうもひどすぎる。キュンツリによると「父母を永遠に心から愛していると称しながら、しかも母親の苦勞性を知っていながら、しかも始めて他郷に行きながら——しかもトリールからボンへの旅は当時としては大仕事だった——その息子が1箇月近くも便りを出さないとは普通とはいえないのではないか」。<sup>⑪</sup>1835年の父の手紙には、「私たちがお前の宛名をはっきり知らないとは変ではないか」。<sup>⑫</sup>それから、ちょうど2年たっても同じような手紙。<sup>⑬</sup>ひどい筆不精、家族と心を通わせようとしめない心の冷たさ、キュンツリはこういうマルクス像の背後に、マルクスの「内心の地獄」、分裂した心情を想定するのだが、それは後廻しにして、引用を続けよう。ついでに書けば、こういう手紙は大月版マル・エン全集(東獨のディーツ版による)にはなくて、モスクワ版の全集(MEGA)にある。べつの手紙からの引用。「2, 3箇月も手紙をくれないことも1度や2度ではない。しかもこんどは、エドゥアルト(カールの弟)が病気で、母が苦勞しており、私も不調であることをお前は知っているはずなのに、しかもベルリンではコレラがはやっているというのに」。<sup>⑭</sup>「私たちは、まともな文通の楽しみを一度も味っていない。……私たちが手紙の返事を受けとったことがない。お前の手紙は、お前のその前の手紙とも私たちの手紙とも何のつながりもない」。<sup>⑮</sup>こんどは母の手紙。「あなたのきょうだいがこぼしていることも私は書きくわえねばなりません。あなたの手紙をみても、あなたにきょうだいがあるとは誰にも分らぬでしょう。きだてのよいヅ

フィー（カールの姉）は、あなたとイエニー（後のマルクス夫人）のために、あれほど心配し、あんなにあなたのために尽くしているのに、あなたは彼女を必要とするときしか彼女のことを思いださないのです」<sup>⑩</sup>。このころの父母の手紙によると、父は、死にかかっているエドゥアルトに1度も手紙をやらないと叱っているし、母は、同じく弟のヘルマンにも2、3行でよいから書いてやってくれと頼んでいる。まったく呆れるばかりに自己中心で冷たい男である。ただし、家族内の愛情を盲目的に賛美する立場から、マルクスの態度を非難するのはどうであろうか。現在のように核家族化が進行していない頃の日本の家族はどうであったか。おしつけがましい愛情というか、おせっかいの焼きあいというか、愛憎のからまり合った濃密な人間関係、これもあまり感心できない。「自我の確立」の邪魔にもなろう。たとえば伊藤整の言うように小説家は逃亡奴隷として家族制度と家族感情との重圧から逃げたのである。ある程度の合理化、冷たさは必要かもしれない。だが、とにかくマルクスの自己中心的態度は異常である。とくに姉のゾフィーを、必要なときだけ思いだすことが興味をひく。父親にたいしても、筆不精のマルクスが急に筆まめになるのは金が入用なときであった<sup>⑪</sup>。また、オランダの親戚のフィリップス一家にたいして、マルクスは、父母の遺産管理者ならびに金づるとしてだけでなく、真実の親愛感を——マルクスにとって例外的に——抱いていて文通も多かったのであるが、エンゲルスが毎年かならず350ポンドくれることになって、金の心配が解消すると、ブルーメンベルクがマルクスとフィリップス一家との関係を綿密に調べたのち書いているように、「それ以後、私たちはほんの時たまにしか、この関係について聞かない」ことになる<sup>⑫</sup>。

こういう自己中心主義、思いやりの無さ、人間的な温かきの欠乏、愛情のなさはマルクスの「感情」の発育不良によるものではなからうか。こういう疑問に答えるデータを拾ってみよう。まずマルクスのベルリン時代の手紙。「……しかし私の大切な最善の父よ、こういうすべてのことを、じかにあなたと話しあえるとよいのですが。エドゥアルトの状態、ママの心配、あなたのおからだの不調、これがあまりひどくなければよいのですが。こういうことを考えると、あなたのところへ飛んで行きたい気持、是が非でもそうせねばならぬという気持になりました。大切な父よ、……この手紙を……優しいお母さん（Engelsmutter）に見せないようにお願いします。たぶん私が不意に到着するほうが、あの偉大なりっぱな女性を元気づけることになるでしょう。……あなたとともに苦しみ、かつ泣き、私がとかく、ごちなくしか表現できない、深い心のつながりと無限の愛情とをあなたのそばで表明することができることを希望しつつ、かつ、大切な永遠に愛される父よ、あなたもまもなく完全に元気になられて、私みずから、あなたを抱いて、私の気持を何もかもお話しできるのだと希望しつつ。あなたの、あなたを永遠に愛する息子カール」<sup>⑬</sup>。

異なった文化のなかに住むわれわれは、この手紙を評価する資格に乏しい。大げさなセリフや身ぶりなども、かならずしも不自然でないことを、われわれは外国映画などで知っている。キュンツリの批評をきこう。「父親は、あんのじょう、心のつながりと永遠の愛との、この極端な、そらぞらしい宣誓にたいして、まったく不機嫌な（sauer）、驚愕といってもよいような反応をしめた。この驚愕はどうみても当然である。なぜなら、父親あての手紙の中で、ただ一通だけ残っているこの手紙は、その感情の高まりの不自然さによって、彼には本当の感情が欠乏していることを証明し、彼の心的素質の中で下位の役割りしか演じていない彼の感情が未発達であり、ある意味では劣等のみまであることを証明している。劣等な感情は劣等感を生みだす。じぶんの感情の質において足りないところを、マルクスはこの手紙の中で無意識のうちに、量とダイナミックさとして代用しようとした。だが心的なものの場合には、量は質へ転化できないのである」<sup>⑭</sup>。

このキュンツリの断定を盲目的に受けとる必要はないが、これを否定することは困難であろう。

つぎのデータは、婚約者イエニーの父、ルトヴィヒ・フォン・ヴェストファーレンへ彼の学位論文を捧げたときの献詞<sup>⑮</sup>である。「大切な、父のような友へ……子供の愛 (kindliche Liebe) のしるしとして」。……「私が、若者のように力強い老人を賛嘆するとき、誰もが……こんなにも幸福であってくればよいのに」。この献詞の、もとの原稿の最後には、「あなたに送るこの愛の使者に、私も同行して、もういちど、あなたとともに、私たちの驚くべきピトレスクな山や森を歩きまわりたく思います」。キュンツリの批評をきこう。マルクスはそのころ23才であった。この長い献詞の賛歌的で陶酔的な調子は、彼が感情の世界では足が地についていないことを示している。マルクスは父にたいする「なかば無意識」の軽蔑や批判から、この人物のなかに、彼が頼るべき「代用父親」を求めたのだが、それにたいする愛情を表現するときに、彼の感情の世界が、いかに未発達で幼児的であることか。しかも高度成長の彼の知性と対比するならば、その感はいっそう強まる。『デモクリトスとエピクロスとの自然哲学の差異』という高レベルの学識をしめす学位論文、その巻頭にくっつけられた歯の浮くような幼児的表現——「私たちの驚くべきピトレスクな山と森」。

つぎのデータは妻への手紙である。1856年6月21日付<sup>⑯</sup>。母の病氣と死のためトリールに帰っていたイエニーへ、マンチェスターのエンゲルスのところ滞在していたマルクスより。キュンツリによると、これは呆れるばかりの手紙であるが、マルクスの心理を知るのに、もっとも参考になる。キュンツリも全文を引用しているわけではないが、それでも長すぎるので、ところどころ拾いだすことにする。「最愛の人よ、私は君に、また手紙をかく。私がひとりぼっちだからだ、そして君が見たり聞いたりできないのに、君が返事もできないのに、いつも頭の中で君と対話ばかりしているのが恥ずかしいからだ」。「とにかく、どんな黒い聖母の絵でも、君の写真ほどに、キスされ、ウインクされ、礼拝されたことはない」。「私は君の現身<sup>うづせみ</sup>の姿と (leibhaftig) あい対し、君の両手を持ち、君を頭から足まで接吻し、君の足もとにひざまづいて、マダム、恋しています、とうめくのだ。私は、むかしヴェネチアのモール (シェイクスピアの人物、かつマルクスの愛称) が愛したよりも、もっと多く、じっさいに君を愛している」。「大きな情熱も、その対象が近くにいると、小さな日常習慣という形式をとるものだが、この情熱は、遠くはなれていることの魔術的な作用によって、大きくなり、あるがままの大きさになる。私の愛もそうなのだ」。「私の君への愛は、君が遠くへ行くやいなや、あるがままの大きさで、つまり巨人として現われ、私の精神と性格とのエネルギーは全部、その中へ流れこむのだ。私は大きな情熱を感じずから、ふたたび私を男として感じている。しかし、この愛は、フォイエルバッハのいう人間への、モレショットの new陳代謝への、プロレタリアートへの愛ではなくて、恋人への愛、つまり君への愛なのだが、この愛が男をふたたび男にするのだ。君はほほえむだろう、愛する人よ、そして私が急に口達者になったわけをたずねるだろう。しかし私が君の甘美な白い胸を私の胸におしつけることができるのなら、私は沈黙するだろう、そして、ひとことも喋らないだろう」。「世の中には女性がたくさんいる。その中には美人もだいぶいる。しかし、その顔つきのひとつひとつが、そのしわのひとつひとつが、私の人生のもっとも大きく、もっとも甘美な記憶をよびさますような顔が、ほかにあるだろうか」。キュンツリの批評。さっと一読すると、何とりっぱな男性、何とすばらしい愛情、何とうるわしい夫婦、というたぐいの印象が起るかも知れない。しかし、よく読むと——このころマルクスは38才、イエニーは42才で、結婚後13年、子供を7人産んでいる。これが、こういう年齢の男の、古女房にあてた手紙であろうか。ニキビ盛

りの若者が、初恋の女にだした手紙ではないのか。しかも1箇月余の孤閨のゆえか、エロティックな情熱さえも感じられないか。「こういうことが書けるのは、彼の結婚生活の平生には、じぶんの感情を、じぶんの愛情を現実には味わっていない男なのではないのか」。マルクスみずから告白しているごとく「はなれていることの魔術的な作用」のおかげで、イエニーへの愛が出現し、男としてのじぶんが感じられたのではないのか。しかもこの愛たるや、彼の年齢相応の成熟と知性とにふさわしい愛情ではなく、むしろ青年の渴望する情熱である。じぶんのことしか考えない所有慾である。イエニーがトリールで母の死の床にはべっていることを知っていながら、彼女の気持、彼女の苦しみにはふれようともしないで、もっぱら自分について、自分の「愛」について語り、かつ夢みているのである。イエニーの母の死について、彼は平生の調子でエンゲルスに書いている。「妻から今日、手紙がきた。彼女は老婆の死によってショックをうけているようだ。彼女は8日ないし10日トリールで過すだろう。たいした額ではないが老婆の残したものを競売するためだ……」<sup>⑧</sup>。

こういう子供っぽさ、したがって思いやりがなくで自分が、現実の人間にたいする愛情のなさ、しかも強烈な闘争癖、他方では天才的な頭脳。こうして、良くいえば非常に個性的な、悪くいえば臭気ぶんぶんの人物像ができあがる。グンテ、シェイクスピア、ゲーテなどの作品を暗唱し、当時の文学にもかなり通じていたマルクスであるが、これらの作家たちの人生観察、人間理解は、けっきょく彼の頭脳によって理解されたにすぎず、彼じしんの心臓によって実感され、再確認される機会は少なかつたのではあるまいか。作中人物の心の動きの中で、怒り、憎しみ、軽蔑といった感情だけしか彼の心臓には読みとれなかつたのではないのか。プロレタリア解放のための、狭義の理論的武器を構想したり、新聞雑誌等に鋭い論説をかいたりする能力は抜群でも、いわゆるオルグ能力の点では、エンゲルスの優秀さとは比べものにならないだろう。長くコンスタントにつきあつた親友もわずかなものだ。ルトヴィヒ・フォン・ヴェストファーレン、フィリップス一家、そしてエンゲルス、このほか2、3名というところだろう。とくにエンゲルスとの友情美談は知れわたっている。しかし、いかにオトナのエンゲルスでも腹を立てたことは何度もあるだろう。その中で記録ののこっている一例<sup>⑨</sup>を、キュンツリからそっくり引用する。「エンゲルスの事実上の妻で、20年ちかくいっしょに暮したメリー・バーンズが突然に死んだという知らせに、マルクスは返事をかいた。『メリーの死の知らせによって私はびっくりし狼敗した。彼女はきだてが良くて快活で、君を愛しきっていた。ちかごろ私たちのグループには不幸ばかりが起るみたいだ。私としても何を考えているのか分らないような気持だ……』。それからマルクスは、じぶんじしの災難について知らせる、——子供たちは外へ出ようにも服も靴もない——しかし、やっぱり気がとがめたのか書きくわえる。『こういう時に私が君に、じぶんの災難の話をするとは、ひどくエゴイスティックなことだ。でも、このやり方は類似療法的(homöopathisch)である。災難はほかの災難で気がまぎれるものだ』。さいごにマルクスは追伸を書きくわえる。『君はこの件で、君のまとも筋の友人、<sup>エスタブリッシュメント</sup>親戚に通知する問題をどうする気だ<sup>⑩</sup>。君は気のむくままに、人間のゴタゴタから解放され隠棲して、メリーの家で<sup>ホーム</sup>家庭をもっていたわけだから、この問題はととても厄介だぜ』<sup>⑪</sup>。エンゲルスは数日まった。それから返事した。『君だつてよく分るだろうが、私じしんの災難と、それにたいする君の冷酷非情な見解とのために、さっそく返事をだす気にはなれなかつた。私の友人たちは誰もが……ほんとうに私の骨身にこたえたこの件にあたって、私があてにした以上の同情と友情を示してくれた。君はこの機会を、君の冷酷な思考法のご立派さをまかり通らせるチャンスと見たわけだ。勝手にしやがれ

(Soit)。(この手書の下書きには、君の勝利を楽しむがよい、文句なしの勝利なんだからな、という文章<sup>⑩</sup>もある)。それからエンゲルスはマルクスの経済的な困窮の話にうつり、これをどうして打開するかという計画をのべる。<sup>⑪</sup>

批判されることに我慢できないマルクスにとって、この手紙はひどくこたえたに違いない。明白に彼は最初は《烈火のごとき》反応をしめした。これは10日たってからの彼の返信によってうかがわれる。『私は返事をだすのに、いくらか間をおいたほうがよいと思った。君には君の事情があり、私には私の事情があって、それによって、この状況を《冷静に》把握するのが困難になっていた』。しかし、それから一度きりのことが起った、マルクスが謝ったのだ。『あんな手紙を書いて、私が悪かった。私は投函するとすぐに後悔したのだ。だけど、これは決して冷酷さから起ったのではない。妻や子供たちに聞いてくれたら分ることだが、君の手紙（早朝についた）をみて私は身内のものが死んだときのようなショックを受けていたのだ。しかし私が晩に君あての手紙をかいたとき、ひじょうに絶望的な状況に影響されながら書いたのだ。家主がよこした競売人がおしかけていたし、肉屋はしつこく代金を請求するし、家には石炭も食べものもない、娘のジェニーは病気で寝ている、という状況だった。こういう環境では、私としては通常、シニシズムしか切りぬける道がないのだ……』<sup>⑫</sup>この弁解の理由は十分に説得力があるわけではない。こういう困窮はマルクスにとっては毎度のことであるが、生涯の伴侶の死はエンゲルスにとって、重大な事件であった。だからこそマルクスは、じぶんの災難の話をして慰めてやろうと思ったのである。

しかし、マルクスにとって、ひとのために自分のことを忘れることは不可能であった。エンゲルスとの友情は、けっきょく、一方通行の友情であって、一切がマルクスの労作という目標にむけられた。マルクスがエンゲルスの健康状態、しごとの調子のことを気にかけている証拠は、あるにはあるが、しかしマルクスがほんとうの心配を示すのはエンゲルスが病気になったときだけである。そして手紙のこういう箇所を読むと、つぎのようなイヤな気持ちを捨てきれないだろう。つまりマルクスの——そしてイエニーの——心配は、いつも、この友人の健康を気ずかっているだけでなしに、《エンゲルスという金づる》がなくなる可能性を気にしていて、こちらのほうに重きがあるのではないのか、と。この点で1857年7月と8月の手紙を読むとよい。このときのマルクスの態度は、ほかのときのマルクスの態度にくらべて、奇妙なコントラストを示している。<sup>⑬</sup>

メリーの死後、エンゲルスはメリーの妹リジーを伴侶にする。2人とも愛すべき魅力ある女性ではあっただろうが、アイルランド出身のプロレタリアであり、エンゲルスの客間で同志たちのあいだで交される熱っぽい議論にたいして馬耳東風だった。<sup>⑭</sup>1878年リジーが死んだ。こんどはマルクスは、エンゲルスの気持を、親身になって思っただろうか。そうではないようだ。そのさいのイエニーへの手紙<sup>⑮</sup>で、エンゲルスのことを冷笑的に言及し、リジーの文盲を嘲笑している。まったく呆れるしかない、度しがたい性癖である。

人間への愛情という言葉は複雑であって気楽には使えない。遠くの人への愛情は容易だが、隣人愛は困難だという。遠くの人——それはマルクスにとってプロレタリアートであった。遠くの、未来のプロレタリアートへの愛、これはマルクスの生きがいであった。だが、現実の、彼の身辺のプロレタリアにたいしても、彼の接した人びとにたいしても彼の愛情は薄かったとしか思えない。彼が『資本論』を捧げたヴィルヘルム・ヴォルフと彼との間の愚劣な紛争を追跡してみよう。怒りと憎しみの感情に駆りたてられるとき、彼の理知は躍動するが、思いやり、人間愛の側面で、いかに不感症的であり被害妄想的であることが。

ヴォルフはマルクスより10才年長である。教師、ジャーナリストを経て、1846年マルクス

とともにブリュッセルに亡命、『新ライン新聞』の編集メンバーとして活動し、1851年以後ロンドンに亡命。フリードリヒ・レスナーとともにマルクスといちばん親しい同志であり友人であったが、1853年、エンゲルスのいるマンチェスターに引っこした。マンチェスターで金をためて、死ぬときマルクスに825ポンドの大金を遺贈した。紛争はヴォルフがマンチェスターに行く直前から始まった。以下はマルクスからエンゲルスへの手紙である。「あの勇ましい小僧（ドロンケ）が、あまりにも悪臭をふりまくので、その結果(1)ループス（ヴォルフ）は、ぼくがもうとっくに君から聞いて知っているのに、自分の出発についてはひとつともぼくに話さなかった。(2)そのループスが君のことになるといつも非常に隠し立てをする。(3)昨日の夜、ぼくは、信じられないような騒ぎを演じた。

ぼくは仕事をしていた。妻も子供たちも部屋の中かにいた。ループスがひどく、もったいぶった足どりではいつか来た——ぼくは、とうとう別れを告げにきたのだな、と思った。というのは、彼はこれまで目前の出発のことはひとつも話したことがなかったからだ。

ぼくは彼から小さなスペイン語の文法書を借りたことがあった。……そいつをぼくは彼に、ぼくがおぼえているかぎりでは、5ヶ月前に返した。そうでなければ、ドロンケがそれをちよろまかしたのだ。

おやじさんは、別々の日にもう2度もぼくの妻とレンヘンとにあのくず本のことを尋ねた。彼女たちは、探しておきましょう、と返事していた。

そこで、昨日の夜——あいつはうならんばかりにしてはいつか来たのだが、ぼくはできるだけなだめるような調子で彼に言った。あの本は見つからない……するとあいつは田吾作的で低脳で厚顔無恥な語調で答えた。『お前はあれを売りとばしたのだろう』。(つまり、ロンドンのどこでもいいからそれを2ファージングで売る人があればぼくはその人にソヴリン金貨を1枚やってもいい、というあのくず本をだ)。ぼくはもちろんとび上った。言いあいが続いた。彼は強情な馬のように彼のたわごとを固執した。つまり『ボクノ家庭ノマンナカデ』ぼくを侮辱したのだ。君も知るように、ぼくは、もうろくした老人たちでも党の長老として尊敬すべき人びとのすることは、たいていは大目に見ているのだ。(当時マルクスは35才、ループスは44才)。とはいえ、それにも限界がある。ぼくがついに彼に向かって歯をむき出したのには、あの老いぼれも驚いたことだろう。

これはみなドロンケのたくらみの結果で、毎日ジンをやりすぎた結果で、脳の水気の切れた結果なのだ。……『頑固おやじ』の特権を主張するのもいい。だが、それを乱用してはいけないのだ……」(1853年9月7日)。

つぎは12月12日ごろの手紙。「これは、君がループス氏のマンチェスター到着以来ぼく個人および両氏に関係のあるすべての件で奇妙に一貫して守ってきた方法なのだ。だから、われわれの文通をただ電報だけに限るようにしないためには、今後は双方ともそちらにいる君の友人や子分たちのことにはいっさい触れないことにするほうがいいのだ」。こんどは12月14日の手紙。「だれでもときには気まぐれなこともあり、人間的なことに無縁ではない、というものではないか。『共謀』だとかそれに類するナンセンスなことはもとより問題ではなかったのだ。多少のやきもちには君も慣れている。そして、けっきょくぼくの気にくわないのは、ただ、ぼくたちは今いっしょにいることもいっしょに仕事をしたり笑ったりすることもできないのに、『子分たち』は君のそばで楽しげにやっている、ということだけなのだ。けっきょくエンゲルスの苦心で、やっと和解、しかしループスの気持は複雑であっただろう。1854年1月25日の手紙。「同封の走り書きは、ぼくに手紙をよこしたループスにあてたもの。免罪だ。」<sup>⑥</sup>

ところでマルクスは子供好きであった。自分の娘たちにたいして子煩悩であり、孫たちを溺愛しただけでなく、まったくの他人の子供でも、見境いなしに頭をなでたり菓子や小銭をやったりした。こういうデータは有名でもあり、手紙やリープクネヒト等の文章から拾いだせるが、引用は省略しよう。この子供好きは彼の人間愛の薄さと矛盾するように見える。はたしてそうか。キュンツリによれば、マルクスの子供好きと人間侮蔑とは切っても切れない関係にある。これは同一の心的構造の両面にすぎない。「深層心理学を実地に使っている人びとには、ずっと以前から知られていることであるが、自分の感情の発展が子供の段階のままどまっている人間は、非常にしばしば、子供たちと抜群によい関係をもつ。リープクネヒトが書いているごとく『マルクスは彼の子供たちといっしょに子供になりきることができた』、彼は『子供たちの間で子供であった』、彼は『子供らしさで目立った』、彼はしばしば妻から『私の大きな子供』と呼ばれた。彼は『幼児のように、まごついたり赤面したりできた』。注目すべきことに、感情と情操との、こういう子供っぽさは、あまりにも一面的に思索だけに従事している知識人に非常に多く見られる。こういう人は子供と接しているときには、みずからの感情世界の未発達を恥じる必要もなく、自分のあるがまま——幼児たちの中の大きな幼児——を示すことができる。これのひどい場合は、マルクスもそうだが、こういう知識人は本当の子供好き（Kindernarr）になる。なぜなら、こういう人は日常生活では、オトナの体面上、仮面をかぶって、自分の感情の劣等性を見破られないように気を配っていなければならぬからである」<sup>⑤</sup>。マルクスの子供好きは、これもストレス解消のためでもあった。

ナチスのボスのヒムラーも子供好きであったが、同時にナチスの犯罪の元兇でもあった。子供好きの裏側が、ヒムラーでは野蛮で狂暴なサディズムであり、マルクスでは人間侮蔑、シニシズム、憎悪、嘲笑となって表現された。あきもせず、しつこく繰り返してマルクスは人間を賤民（Gesindel）と呼ぶ。キュンツリによれば、「したがって、いまここにいる人間、こういう人間のくずどものことは、どうでもよかったのであって、未来の人間のことを気にかけてのである。彼があまりにもしばしば軽蔑し、嘲笑し、憎悪した『隣人という汝』を愛することではなく、もっとも遠くの人間という『偉大な我々』を愛すること、これが彼の関心であった。この故に、この労働者解放運動、共産主義の始祖は、一生涯、労働者を軽蔑的な侮称で呼びつけた」<sup>⑥</sup>。さらにキュンツリの推察によると、プロレタリアートの悲惨が、マルクスの同情と怒りをよびさましたことは確かではあろうが、この軽蔑すべき疎外された人間たちを、みずからが軽蔑し憎んでしまう気持のほうが、とかく先行してしまったことであろう。プロレタリアもブルジョアも、憎むべき軽蔑すべき人間と見えた。1843年にマルクスは専政君主制下の人間について述べる。「専政君主制の唯一の思想は人間侮蔑、非人間化された人間である。そしてこの思想は、ほかの多くの思想とくらべると、同時に事実でもあるという長所をもっている」<sup>⑦</sup>。

要するにオトナはみんな愚劣で下劣でいやらしい。オトナでない人間、つまり子供だけが可愛いくてマトモでステキな人間なのだ。1857年の『経済学批判への序説』の終りで、ギリシア芸術がなぜ現在も享受されるかの問題にふれて彼は書く。なぜ「ギリシアの芸術や叙事詩が……ある種の社会的発展形態に結びついているにもかかわらず……いまなおわれわれに芸術的享樂をあたえ、ある点では規範として、また到達できない模範として通用するのか」と彼は問い、次の答をだす。「おとなは二度と子供にはなれない。なるとすれば（もうろくして）子供じみるのである。しかし、子供の無邪気さはおとなを喜ばせはしないだろうか。そして、おとなは、ふたたびより高い段階で、子供の真実を再生産することにみずからつと

めるべきではないだろうか。子供の性質のなかには、どの時代にもその時代特有の性格がその自然の真実さでよみがえるのではないだろうか。人類が最も美しく発育するその歴史的幼年期、なぜ、それは、2度とは帰ってはこない段階として、永遠の魅力をあたえてはならないのだろうか。<sup>⑩</sup>ここでマルクスは抒情詩人になっている。マルクスの言葉には、なまなましい実感がこもっている。おとなという、墮落状態から「ふたたびより高い段階へ」、ここに彼の現実として人間侮蔑と、彼の憧憬としての天上的な無邪気さが語られている。こうしてマルクスにおいて、彼の子供ずきと人間侮蔑とは双生児のごとく、手に手をとって暗い浮世をあゆむのである。<sup>⑪</sup>

マルクスがポルノグラフィーを愛好したことは彼の感情世界の未熟のあらわれである、というキュンツリの断定は、マユにツバをつけて聞くことにしても、キュンツリの集めたデータは興味があろう。彼が、かつての親友で、当時すでに仲違いしていたフライリヒラートの娘が結婚したとき、彼がその娘に言及した卑猥な表現も、彼の初期の詩にでてくる卑猥があった表現も省略して、エンゲルスへの手紙から引こう。「カサニャックの先祖（だかもっと機智に富んだ）ピエトロ・アレティーノから彼の『恋の疑い』の次のような序詞を君にお知らせしよう。

まえがき／二重にご立派なアネロ様／なにがどうしてかをご存知のあなた／あなたはふかき鋭知もて／バルトロとバルドのからだのことを／またあなたのすばらしいファンタジーもて、星とともに過ぎゆく掟をお話しになれます。／きょう女郎屋で大きな騒ぎをまきおこした／疑いをどうぞ私におあかしください。

おまえたち人間は女郎買いと女郎の2種類だ、／男女それぞれの性器をもった。／そして多くの魂はその彼方に失われた、云々<sup>⑫</sup>（1852年7月6日）。つぎはマルクスが陰部の近くに、2つのデキモノができたと報告してから、「ちょうど陰部の話をしたところだから、16世紀のフランスの風刺詩人、マチュラン・レグニエの次の詩をおすすめしよう。この領域での私の博識（Belesenheit）にもかかわらず、私は、淋病がかつてこんなにも詩的にえがかれるとは思わなかった」（1867年10月19日）と書いて、その詩を引用している。マルクスがこの方面の博識をじまんしているところは面白いが、この頃のマルクスは『資本論』のために「彼のあらゆる時間、健康等を犠牲にしていた」はずではなかったか。つぎの手紙ではイタリーの宗教裁判で、尼僧の口から発せられた卑猥な言葉を引用してから「ロシア人はこういうことでは、もっとすごい。たしかな話だが、屈強な青年が、ロシアの尼僧院に24時間いたただけで、死んで出てきた。尼僧たちが彼を乗りつぶしてしまったのだ」（1867年11月7日）。こういうデータを見れば、マルクスのポルノ趣味は、アメノウヅメノミコトのストリップ興業によるヤオヨロズの神々の洪笑とか、近頃の週刊誌のような露出とのぞきといったナイーブな大らかなものではなくて、ワサビの利いたポルノ趣味、つまり、性を通して人間の愚劣と悲惨、人生の不条理を垣間見せるもの、自己侮蔑をふくめての人間侮蔑を再確認させるもの、こういう材料とこういう視角に立脚するポルノ趣味であるように思われる。

こんどは子供っぽさの別の面、生活処理の投げやり、および浪費癖のデータを眺めよう。

金が入用になると急に筆まめになる息子カールから、たびたび金をせびられて、ポンの大学へ行ってから5ヶ月で160ターレルもむしり取られた父が書く。「これは、どう見ても普通ではない。愛するカールよ。くりかえして言うが、私は何でも喜んでやってくれる、だが私は多くの子供たちの父として——それに私が金持ではないことはお前だってよく分ってい

る——お前の学生生活に必要な金額以上はやる気はないのだ。……私は確信しているが、もっと金が少なくともやっけて行けるはずだ、そして当地のノタール・ミュラーさんだって、もっと少ししか送金していないが、それでももっとうまく暮しているはずだ」<sup>④</sup>これから2年もたない頃、ベルリン大学の息子へ、「まるで私たちが金を作り出す小人であるみたいに、息子殿は、あらゆる約束に反しあらゆるしきたりに反して1年間に700ターレル近くも使った。どんな大金持だって500ターレルも支出しないのに」<sup>⑤</sup>父が死ぬ2、3ヶ月前に書いた最後の手紙でも、4ヶ月で280ターレルも送られたと、叱っている。当時ベルリンのある市参事官(Stadtrat)が年俸800ターレルであった<sup>⑥</sup>。マルクスは学生のくせに、それを上廻る金を使ったわけである。父と息子との間には、金だけが原因ではなしに、当然、本格的な衝突が予想された。しかし父は死んだ。母は息子に家長の役割りを期待する。早く学位を取って職について貰いたい、そういう気持で母は、夫が死んで半年後160ターレル送った。「この金を学位を取るのに使いなさい」<sup>⑦</sup>母は間もなく学位を取れるものと思ひ、息子もそう思っていたのであろう。しかし息子は家長の役割りなどは念頭になく、悠々とスネカジリの特権を享受し、金を要求しつづけた。友人たちから尻をたたかれたあげく、論文をまとめ学位を取ったのは3年後だった。夫が死んでから弁護士の収入はなくなり、母は5人の未婚の娘をかかえて、遺産の利子だけで、将来とも暮して行かねばならなかった。しかし「人類の福祉」を自己の天職と思ひはじめていた自己中心主義の甘えん坊にとっては、微々たる一家の運命など眼中になかった。衝突が起った。遺産をめぐる争いである。遺産の取り分にかんするこまかい数字をキュンツリは教えてくれるが、これは省略しよう。要するにマルクスが貰えた相続分は、彼がベルリンで1年間に浪費した額よりも少なかった。そしてこれは正当であった。マルクスは、より多くを要求した。この相続争いは小都市トリールの話の種になった。この時からマルクスにとって「天使のような母」、「優しい立派な女性」は、たんなる「婆さん」(die Alte)となる。しかしマルクスは、いくらかずつでもむしり取ることを止めない。とうとう母はオランダの義兄、弁護士リオン・フィリップスに遺産管理者になって貰う。こうしてマルクスはオランダのフィリップス一家と接触するようになる。この一家は、人間侮蔑のマルクスにとって例外的な、肯定し賛美しうる人たちであった。各人がのびのびと自由に個性を伸ばし自由に行動する一家、ブルジョア社会の中の、一ブルジョア家族であったにもかかわらず、この一家はマルクスが将来の無階級社会の人間を考えると、1つの原イメージとなった<sup>⑧</sup>。(ついでに書くと、このリオンの息子のアウグストが、マルクスに鉄道就職を配慮し、娘のアンネッテが第1インターのオランダでの第1号メンバーとなった。ただし後に結婚して脱落)。

ところでマルクスの実生活における投げやりぶりはイエニーとの結婚の件にも示されている。彼らがひそかに婚約したのは1835年である。これはやがて双方の家族に公表せざるをえなかった。名望の貴族のお嬢さんとユダヤ人のこせがれとの結婚、双方の父親同志に親交があったとはいえ、かつイエニーの父がマルクスを評価し可愛がっていたとはいえ、トリールでは、かなりのスキャンダルであった。それなのに結婚したのは1943年である。このときマルクスは、もうすぐ25才、イエニーは29才。のんびりしたものだ。だが、ヘーゲル哲学に酔って壮大な人類史全体、天下国家を、頭の中で手玉にとり、「人類の福祉」を夢みっていた自己中心主義者にとっては、こんなことぐらい平気であった、とも思える。だが、じつは気になっていたのだ。気にしながらも、しかたがないままに、ほったらかしていた。父が早く卒業して結婚しないかと手紙で注意すると、ヒステリックに激怒するのだ。父の手紙を眺めよう<sup>⑨</sup>。「お前は不思議なやりかたで、何千人もの人が羨むような乙女の心を奪ったのではないか」。

「くりかえすが、お前は大きな義務を引きうけたのだ。そして、愛するカールよ、お前の怒りっぽさを刺激することは覚悟の上で、私は私の意見を、私の流儀でいくらか散文的に語るのだ……私は、かならずしも正当とは言えないお前の怒りっぽさを心配している」<sup>①</sup>。マルクスの父が死ぬと双方の家の関係は冷却し、もともと障害の多かった婚約は雲行きが怪しくなる。1840年5月29日の母の手紙。誤字だらけの、たどたどしいドイツ語の文章であるが、そのたどたどしさを訳出することはあきらめる。「あなたにとって、いままで大切であったものを、まったくあきらめねばならないので、どんなに私がつらい涙を流したか、いままでのおたがいの家のあいだの関係を知っている人ならば分ってくれるでしょう……あなたのお父さんが死んでから、もう6週間にもなりますが、ヴェストファーレンの家族はだれも姿を見せません」<sup>②</sup>。イエニーだけが5週か6週ごとに顔をだして、困っている事情をこぼすのだった。つぎは1843年3月13日のマルクスからアルノルト・ルーゲへの手紙。これは『ライン新聞』が発刊禁止処分を受け、ドイツ国外で『独仏年誌』をだす相談をしている手紙である。「私はもう7年以上婚約しており、私の婚約者は、『天国の主』と『ベルリンの主』とを同じ礼拝対象にしているような彼女の親類にたいして、同時にまた何人かの坊主と私の別な敵とがわがもの顔にふるまってきた私自身の家族にたいして、このうえなくきびしい、彼女の健康を潰してしまいそうな闘争を私のためにやってきた。だから私と私の婚約者とは、3倍も年上の……人々以上に、不必要で消耗的ないざこざを長年たたかいぬいてきた」<sup>③</sup>。イエニーの側の敵とは、たとえばイエニーの異母兄フェルディナント・フォン・ヴェストファーレンであった。彼は父の先妻の子で、イエニーよりも15才年長であり、後にプロイセンの内相となって、当時の反動路線の熱烈な代表者として有名になった。かつ、当然ユダヤ人が嫌いであった。

だがとにかく、婚約しておきながら7年もそのままとはいい度胸だ。恋は思案の外でもあり、無鉄砲は青春の特権である。青春の無鉄砲こそ進歩と変革の原動力なのだ。しかしマルクスの父のように「散文的に考える」ことも必要なのだ。早くイエニーと結婚するためには、さっさと論文をまとめて学位をとり、まあまあの職につかねばならぬ。だが論文の執筆はほったらかしている。しかも「パンのための労働」など、およそ眼中にない。それはそれでもよい。だがイエニーを愛しイエニーのためを思うなら、イエニーの周囲の人の希望どおりに、イエニーに因果をふくめて婚約を解消し、身分相応で生活力のある男と結婚するようにすすめるべきであろう。だが、これもほったらかし。イエニーは「不必要で消耗的ないざこざ」を7年間もたたかいぬくことになる。そして遂に29才の新婦、これは当時としては大年増である。いっぼう「パンのための労働」を軽蔑するのは結構だが、けっきょく母親からまきあげるしかない。母との「不必要で消耗的ないざこざ」の張本人はマルクスである。こうして「大きな坊や」のマルクスは家族に甘え、イエニーに甘え、エンゲルスに甘えて、生活の処理は投げやりで押しとおし、その尻ぬぐいは周囲の人が負担することになる。

延期に延期をかさねたあげく、ようやく学位をとったマルクスは、ブルーノ・バウアーの世話でボン大学で教職につくことを期待していた。あいにく、かんじんのバウアー自身が、そのヘーゲル左派の「危険思想」が原因で、ボン大学で首がとびそうになっていて、マルクスの就職はお流れとなる。しかしマルクスは平気であった。大学に就職したければ学位論文のほかに就職論文をかくのが普通であるらしいのに、マルクスが就職論文に着手した形跡はない。学位論文をそのまま就職論文に使う、という虫のいいことを考えていた。それから『ライン新聞』に関係することになるが、この件は周知のことだから省略する。ただし、『ライン新聞』では彼の「人類の福祉」の「天職」が、そのまま「パンのための労働」になりえ

たことに注意しておこう。もうひとつ、『ライン新聞』によって「木材盗伐」とか「検閲制度」とかいう現実的な問題が彼の目に見えてくるのだが、彼じしんの生計というもっと現実的な問題にかんしては、いぜんとして夢遊病者にちかいこと。

『ライン新聞』の多忙から解放されて、ようやく結婚。学位をとってから2年もたっていた。結婚するとそのまま5ヶ月間、クロイツナハのイエニーの母のもとで暮らす。おそらくは平然とイエニーの母に寄生していたのだろう。新婚生活、しかしマルクスは本の山と格闘していた。キュンツリの調査<sup>⑤</sup>によると、マルクスがクロイツナハで読破した本は計45冊、約2万頁で、細字でぎっしりつまった書きぬきノートが250頁。何とも奇妙なハネ・ムーンである。あれだけ待たせに待たせた結婚なのだから、もっとイエニーのお相手をしてやるべきではないのか。子供っぽい自己中心主義というべきか、天才的というべきか。

クロイツナハで寄生生活をしながら、文通によって、国外でだす2、3の雑誌の計画に参加していたが、この計画が挫折しても気にした気配もない。アルノルト・ルーゲの努力によって、パリで『獨仏評論』がでることになり、マルクスには1800フランの年俸と執筆原稿にたいする報酬が約束された。パリ生活の経済的裏づけができ、1843年11月マルクス夫妻はパリへ行く。創刊号は翌年2月にでた。だがこのなかのマルクスの文章にも、エンゲルスという若い男の文章にも、はっきりと共産主義への移行が見られた。プロイセンへの持ち込みは禁止され、かなりの部数が国境で差し押えられた。革命を宣伝したかどによりマルクスにたいしてプロイセン政府から逮捕状が発せられた。雑誌は経済的に行きづまり出版社は破産を宣言した。これにくわえてルーゲとマルクスとの思想的対立から喧嘩となり、創刊号は終刊号となった。約束の金は貰えず雑誌の現物を貰っただけで、コルニユの推測では、これを売って生計のたしにしていた。<sup>⑥</sup>すでに述べたような「経済学の本」の執筆も進まなかった。しかしエンゲルスは出版社から1500フランの前渡し金をマルクスに送らせた。マルクスの窮状を見かねてケルンの友人たちが拠金をして4400フランをマルクスに送った。<sup>⑦</sup>とにかくマルクスはパリでも、財布が重くても軽くても「パンのための労働」は念頭になく、ブランキー等の「義人同盟」との接触、読書と思索、そして論争の文章(既出)と多忙であり、家庭や家計のことは投げやりであった。そして1845年1月、国外追放の処分をうけてブリュッセルへ行くときには、一文なしになっていた。

そしてブリュッセルでの経済的困難。友人たちから金を貰ったり借りたり、母とかフィリップス一家も狙われた。これは乞食の一種であるが、金策のために時間とエネルギーを浪費しながらも、「パンのための労働」をやる気はなかった。やがて二月革命の余波によって『新ライン新聞』が発行できることになった。これによってマルクスの「天職」と「パン」とが両立しそうになった。しかしこの「雪どけ」はみじかく、ふたたび「冬の時代」がきてロンドンへ亡命することになる。

ロンドンでの耐乏生活は周知のことである。ゲルツェン(ヘルツェン)のようなロシアの大貴族ならばいざ知らず、亡命生活は苦しいにきまっている。しかしマルクス以外の亡命者はパンのための労働をいとわなかったが、マルクスは妻子をかかえながら、こういう労働をする気はなく、むしろ軽蔑していた。家族にたいするマルクスの無責任、これが窮乏の根本原因である。ところでほかの亡命者はどういうふうにしてパンにありついたかを眺めてみよう。

マルクスからヴァイデマイアーへの手紙(1859年2月1日)。「私は私の目標を、何がどうあろうとも追い求めねばならない。そして私を金作り機械(money-making machine)に変えるようなことを、ブルジョア社会にたいして許すわけには行かない……ループスは家庭教

師をやって、まあ我慢できる暮らしをしている。フライリヒラートはロンドンでスイスの銀行の支店長 (manager) をしている。ドロンケはグラスゴーで取次店の代理人をやっている。イマントは……で教授をしている。このほかキュンツリがマルクスの手紙から拾いだしたところでは、学校教師、ドイツ文学の女性大学教授 (ルーゲ夫人)、工場の指導員 (common instruktör) といろいろある。エンゲルスもマンチェスターで社員になって、20年近くも勤続した。

こういう「パンのための労働」をマルクスだってやればやれたはずである。だがやらない。貧民窟の住居、栄養不良による幼児の死。死産。棺桶を買う金がない。質屋通い。しかし就職の努力は鉄道の件だけである。キュンツリの批評をきこう。「自分の子供たちが死んで、ひどいショックをうけているときですら、彼には自分の無能力が……こういう死にたいして責任があるかも知れないという考えは浮かばなかったように見える」。そして、借金のためロンドンのあちこち、それどころか海をこえてヨーロッパまで行く時間とエネルギーを考えるなら、あっさり語学の家庭教師とかパート・タイム労働でもやったほうが気がきいている。『ニュー・ヨーク・ヘラルド・トリビューン』等の出版物に寄稿するばあいは「天職」からパン代が、でてくることになるが、その稿料にエンゲルスからの送金を足しても、どうせ家族の生活費には不足であろう。しかも彼は金の使いかたがデタラメである。『資本論』とか第1インターの運営とかいう本格的な天職だって、乞食をするよりは、むしろ「パンのための労働」をやりながら実行すべきではないのか。「エンゲルス自身がマンチェスター時代の20年間で実証したように、日中まるまる事務所にすわって、そのかたわら大量の通信事務を処理し、多数の本と新聞を読み、たえまなく論説をかき、本も何冊か完成する、こういうことがスムーズにやられているではないのか」。

無責任な投げやりの態度は、経済面だけでなく日常生活にもあらわれていた。プロイセンから派遣された密偵がベルリンの警視総官へあてた報告をみよう。「ほんとうのジブシー生活です。洗ったり櫛を使ったり下着をかえたりは、めったにやりません。酔っぱらうのが大好きです……きまった睡眠の時間、きまった起きている時間など彼にはありません。徹夜の連続などしょっちゅうですが、そのあとでは、またもや正午に服を着たまま寝椅子カナベに横になって晩まで眠り、ひとが自由に出たりはいたりしても、おかまいなしです……マルクスの住居にはいると、石炭と煙草との煙で目をやられて、はじめはまるで地獄のなかで手探りしている心地ですが、そのうちに煙に目が馴れてくると、霧のかかったような人と物が見えてきます」。

経済的にも生活的にも無責任な投げやりな態度、そのしわよせはイエニーにきた。イエニーは頭がおかしくなった。キュンツリの診断によると強度のヒステリーとノイローゼである。これはよくなったり悪くなったりした。しかし3人の娘たちは、母の死後も母のことを語りたがらなくなる。キュンツリの集めたデータから引用しよう。(なおキュンツリによると東獨でルーゼ・ドルネマンという人のイエニー・マルクスの伝記がでているそうである。この本はイエニーと夫との牧歌的で感動的な物語りであるが、一面的で歪曲されたイエニーの姿が示されている。マルクス崇拜の気持には、おあつらえむきだろうが、だからこそ非神話化が必要なのだ)。<sup>⑧</sup>1850年夏、マルクスからヴァイデマイアーへの手紙。「私の妻の興奮した手紙を悪くとらないでほしい。彼女は気が落ちついた」。<sup>⑨</sup>同じく1年後、「こんな状態が長く続けば、妻は潰れてしまう。……だがわかってもらいたいことは、私の妻は病身で、朝から晩まで不愉快な日常的困窮に追いまくられ、その神経組織は衰弱し切っていて……」。<sup>⑩</sup>その後エンゲルスへの手紙で、つぎつぎと病状の悪化が伝えられる。1854年、「私の妻の容態が危険

なので……」。<sup>⑧</sup>1855年、「妻は何週間も前から、いままでに例がないほど、精神的な興奮で病んでいるので……」。<sup>⑨</sup>1856年も57年も同様の手紙。<sup>⑩</sup>57年に死産。1958年、「妻は死産で精神錯乱を起している」。<sup>⑪</sup>そして毎年2、3度はこういう状況がエンゲルスへ報告されることになる。1862年6月18日、「妻は毎日、死んだ子供たちといっしょに墓の中に横たわりたいと言う」。その1年後、「妻は2週間前からベッドに寝たきりで、ほとんど完全につんぼになっている」。1868年11月30日、「妻は数年前から……自制心 (temper) がなくなって、その苦悩と怒りっぽさと不機嫌とで子供たちを死ぬほど苦しめる」。

身からでたさびとは言え、マルクスも被害をうける。1854年3月9日、「家の中はトラブルがいっぱいで、新聞もまともに読めない」。1863年1月8日、「自由に私の気持を話せるような人間はロンドンじゅうに1人もいない。しかも私自身の家の中でも私は沈黙のストア哲学者の役を演じている。もういっぽうの側 (イエニー) からの爆発にたいしてバランスを保つためだ」。1870年、エンゲルスが「出資社員」となって、月給取りの足をあらひ、ロンドンへ来たのでマルクスとの文通は終る。エンゲルスからの「年金」でマルクスの生活は安定し、イエニーの病気もいくらか良くなったようである。

マルクスはもっと無責任なことをした。だがこれは無責任、自分勝手といった物差しではかされるものではなく、人間の宿業、原罪という言葉が暗示するような、近親相姦めいた重くて暗い事件といふべきか。マルクスとヘレーネ・デームートとの間に私生児がいたのだ。ヘレーネはマルクスの家政婦である。トリール近郊の農家に生まれ、はじめイエニーの母の小間使いとしてつかえ、パリでイエニーがはじめて出産するさいに、イエニーお嬢さまのための、おつきの女中として派遣されて、その後ずっとマルクスの家族の一員として暮してきた。家事も子供の世話も一手に引きうけ、イエニー以上に母であり主婦であった。リープクネヒト、カウツキー等も彼女について、あたたかい思い出をしるしている。

1898年9月2日、カール・カウツキーの前夫人ルイーゼ・フライベルガー・カウツキーがアウグスト・ベーベルにあてた手紙。その中から私生児フレデリック・デームートに関係のある部分だけをブルーメンベルクが抜きだしたもの。

「愛するアウグストよ……フレッディ・デームートがマルクスの息子であることを私は將軍 (エンゲルス) から聞いて知っています。タッシー (エリナー・マルクス) があんまり強引にせがんだので、私が直接、あの老人に聞いたことになったのです。將軍はタッシーが、じぶんの信念にそれほどまでにしがみついていると聞いて、とても呆れていました。それで彼は、エンゲルスが自分の息子を否認しているという陰口にたいして、必要のさいには対決する権利を、すでにそのころ私にあたえました。私がこの件を將軍が死ぬよりも、だいぶん前に、あなたにお知らせしたのを覚えているでしょう。

さらに將軍は死の数日前に、フレデリック・デームートがカール・マルクスとヘレーネ・デームートとの息子であることを、ムーア氏にはっきり断言したのです。それでムーア氏はオーピントンのタッシーの家に行き、そのことを彼女に伝えました。タッシーは、將軍は嘘をついている、あの子の父親は自分だと彼自身がいつも言っていた、と言い張りしました。ムーア氏はオーピントンから帰って、もういちど將軍につっこんだ質問をしました。しかし將軍は、フレッディはマルクスの息子だ、という前言をくりかえすだけでした。そしてムーア氏に、タッシーはお父さんを偶像にしたいのさ (Tussy wants to make an idol of her father), と言いました。

日曜日、つまり死の前日に將軍はタッシー自身のために、そのことを石盤に (喉頭ガ

ンのため声がでなかった)書いてやりました。するとタッシーはひどいショックをうけて外へ出てきて、私にたいする憎しみもすっかり忘れて、私の首にだきついて、ひどく泣きました。

将軍は私たち、つまりムーア氏とルートヴィヒと私に、彼のフレddieにたいする態度がけちくさいとって彼を非難するものがあつた場合にだけ、この打ちあけ話を使用する権利をあたえました。彼は、自分の名を汚されたくない、それにいまとなつては隠したところで誰の得にもならないし、と言いました。彼がマルクスの身代りなつたおかげで、マルクスは重大な家庭のいさかいから助かつたのです。私たち夫婦とムーア氏とマルクスの子供たち以外に——ラウラはこの事件を、たぶん直接には知らなかつたにせよ、感づいていたと思います——レスナーとプフェンダーが、マルクスの息子がいることを知っていました。レスナーはフレddieの手紙が発表されたあとでも私に話しました。『フレddieはたぶんタッシーの兄だ。私たちは、このことをちゃんと知っていたのだが、その坊やがどこで育てられているのか分らずじまいだつた』と。

フレddieはマルクスとこつけないくらい似ています。ふさふさした青黒色の髪のはっきりユダヤ人とわかるあの顔を見て、将軍と似たところを嗅ぎだすには、よほどの盲目的な先入観が入用でしょう。私は、そのころマルクスがマンチェスターの将軍に送つた手紙を見たことがあります。将軍はそのころロンドンに住んでいなかったのです。この手紙も、ほかの多くの往復書簡も将軍が処分したと思います。

以上がこの事件について私の知っていることのすべてです。フレddieは自分の父が誰であるかを、その母親からも将軍からも聞かされていません。私はフレddieと、私がはじめてロンドンに来たころから、知りあいになっていました。年よりのニム(ヘレーネ・デームート)が彼を私に、彼女のお気にいりの人(Liebhaber)だといつて紹介しました。そして彼も規則的に毎週、彼女を訪ねてきました。しかし奇妙にも彼はけつして玄関を通らないで、いつも台所を通つてはいました。私が将軍の家に住むようになって、彼は訪問を続けていたので、私は彼が訪問者としてのあらゆる権利をもつように配慮しました。

あなたがこの問題にかんしてお書きになつたお手紙を、もういちど読み返しました。マルクスは離婚のことを、いつも思つていました。彼の妻は非常に嫉妬ぶかつたからです。彼はあの坊やを愛してはいませんでした。あの子のため何ひとつしてやる勇氣はありませんでした。そんなことでもしたら大へんなスキヤンダルになつたでしょう。あの子はルイス夫人とかいう人——その人はそう署名していたと思います——のところへ里子に出されました。そして彼も里親の姓を名乗っていました。ニムが死んでから彼はデームート(Demuth)という名前を使いました。マルクス夫人が一度ロンドンの夫から家出してドイツへ行つたこと、そしてマルクスと妻とは長い年月いっしょに眠らなかつたこと、これをタッシーは非常によく知っていました。しかしこのことの本当の理由を考えることは、彼女にとってできない相談でした。彼女は父を神化し、すばらしい伝説を心にえがいていたのです……

あなたのルイーゼ」。

ルイーゼはカウツキー夫人であつたころから、エンゲルスともヘレーネ・デームートとも親しかつた。1888年、彼女はカウツキーと離婚した。マルクスが死んでからヘレーネ・デームートは、ずっとエンゲルスの世話をしていたが1890年に死んだ。エンゲルスは快活なヴィーン女のルイーゼが大好きだったので、彼女に頼んで自分の家に住んでもらい、秘書と家政婦の役をやつてもらつた。1894年、彼女は、ロンドンで働いていた医者の方ライベルガーと結婚した。2人ともオーストリーの社会民主党幹部のヴィクトル・アードラーの友人だつた。

アドラーからも頼まれて、主治医として秘書として夫婦でエンゲルスの世話をした。晩年のエンゲルスと、もっとも親しかったことになる。

ブルーメンベルクによると、1900年ごろの社会主義運動の指導たちにとって、私生児の件は公然の秘密であった。だが彼らは、その政治的な影響を心配して、これをひたかくしにかくした。

イエニーのヒステリーも貧窮だけが原因ではなかった。かつキュンツリのいうごとく、プロレタリアートを、人類を、疎外から解放しようと苦闘したマルクスが、じぶんの足もとで、じぶんの息子を疎外したことになる。なんという喜劇的悲劇、なんという悲劇的喜劇。

フレッディにかんしては、そのご調査が進められた。彼は1851年6月23日に生まれた（このときイエニーが37才、マルクスが33才、デームートが28才）。小銃を製造する工場の労働者として一生を送った。じぶんの父とも知らずにマルクスやエンゲルスを読み、労働組合の運動などもした。1929年1月28日に死んだ。一時結婚していたこともあるが子供はなく、貰い子を育てた。その子が90才でまだ生きている……<sup>79</sup><sup>80</sup>

ユダヤ嫌い、これもマルクスの顕著な性癖である。25才のマルクスのルーゲへの手紙。これが現在のこっているかぎりでのマルクスのユダヤ嫌いの最初の明瞭なデータである。「イスラエルの信仰は、私にとってじつに不愉快なのだが……」<sup>81</sup>。エンゲルスへの手紙でも、「ユダヤ人のエジプト脱出とは『かさぶただらけの国民』をエジプトから追放した物語り……にほかならない。……こうしてラザロ、すなわちかさぶただらけの男がユダヤ人の原型なのである」<sup>82</sup>。晩年ラムズギット海水浴場からエンゲルスへ、「ここまで来てみても、ハエとユダヤ人がうようよ」<sup>83</sup>。

『獨仏年誌』にのせた2つの論文、『ユダヤ人問題によせて』と『ヘーゲル法哲学の批判』とによってマルクスは共産主義へ移行したのであるが、キュンツリによれば、この『ユダヤ人問題によせて』は、はなはだ粗雑な論文である。この論文はマルクスがブルーノ・パウアーの同一テーマの論文と対決しながら、彼自身の新しい世界観の正しさを証明してみせるとともに、彼自身がもはやユダヤ文化と関係ないことを誇示したものである。「貨幣はイスラエルのねたみ深い神であって、その前ではいかなる神も存続することを許されない」。この思弁的な小細工を補強するために彼はユダヤ人を2つに分ける。「現実の世俗のユダヤ人を考察しよう、パウアーのやったように祭日のユダヤ人ではなく、日常のユダヤ人を」。要点は祭日のユダヤ人を日常のユダヤ人を通して理解することにあつた。「ユダヤ人の秘密をその宗教の中に求めないで、この宗教の秘密を現実のユダヤ人の中に求めよう」。この方法がユダヤ教ならびに現実のユダヤ人問題を考察するのに有効であるかどうかは別問題にして、マルクスに案内してもらうことにしよう。この方法でマルクスは何を見たか。「ユダヤ教の世俗的根底は何であるか。実用的な慾求、つまり自分の利益。ユダヤ人の世俗の礼拝は何であるか。高利貸。ユダヤ人の世俗の神は何であるか。貨幣」。こういう日常のユダヤ人から推論されるユダヤ教とはどういうものか。「ユダヤの宗教の根底にあつたものは何か。実用的な慾求、つまり利己主義。それ故にユダヤ人の一神教は、現実には、多くの慾求の多神教である……」。こういうとげとげしいユダヤ嫌いの言葉使いをしないで、キュンツリは普通の言葉で、この論文の思想的核心をまとめてみせる。「ブルジョア社会というこの現実世界は、自利の、利己主義の、貨幣神化の、高利貸の世界であり、このことによって利己的な個人が種から疎外されている世界である」。これは資本主義社会の構造のスケッチとして、当時としては革命的な意義をもっていた。だが、これで「ユダヤ人問題」を論じたことになるだろうか。

これで「現実のユダヤ人」を考察したことになるだろうか。ユダヤ人と高利貸とを同一視することは当時の偏見を安易にうけいれているだけではないのか。ユダヤ教関係の文献も利用しないし、「現実のユダヤ人」を自分の肉眼と足とで観察することもしないし、その資料にあたってもない。『資本論』のデータのためには、あんなに大英博物館をあさり歩いた彼が、この論文は頭だけの思弁で書き流している。たとえばこういうデータはどうだ、とキュンツリは引用する。

「マルクスの『ユダヤ人問題によせて』という論文が発表された1844年には、バイエルンでは約1万人の就業ユダヤ人住民のうち半数よりもずっと多くが手仕事か農耕に従事していた。同年プレスラウとオッペルンでは約5000人の就業ユダヤ人住民のうち1150人が給仕か女給仕、669人が機械工具、職人または工芸職人、625人が下男か下女、344人が馬商人、270人が医者と教師、152人が農民、81人が日雇いであった。これ以外に233人が乞食をしてあるき484人が病院か救貧院に収容されていた。残りの者——したがって約1000人、つまり5000人の20パーセント——が商業で暮っていた。<sup>⑧</sup> こういう商人たちが、すべて高利貸をしていたとしても、こういう『高利貸しユダヤ人』は当時のユダヤ人の5分の1にしかすぎない。……1808年……パリで2534人のユダヤ人のうち高利貸をしていたのは4人である」。<sup>⑨</sup> マルクスはユダヤ人が差別されて、種々の職業から閉めだされているの知らないのか。マルクスの父が、ユダヤ教を棄てなければ、弁護士がやれなくなって飯が食えなくなる危険にさらされたことを知らないのか。彼の親戚や祖先の律法学者たちは高利貸であったのか、とキュンツリは詰問する。キュンツリによれば、マルクスによるユダヤ教の性格づけは、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』から、言葉使いも、ほとんどそっくり引き写されたものである。ユダヤ嫌いは当時としては、ありふれた現象であるが、マルクスのユダヤ嫌いの言葉には、なにやらコンプレックスじみたもの、自己憎悪のひびきがある。『フォイエルバッハにかんするテーゼ』でも、フォルエルバッハの実践概念を批判するさいに、「不潔でユダヤ的な」という言葉を使っているが、こういうユダヤ嫌いは『資本論』にまで忍びこんでいる。「ついでに述べておくが、商品語も、ヘブライ語のほかになお多数の、多かれ少なかれ正確な方言をもっている」。<sup>⑩</sup> また同書の他の箇所でも、「資本家は知っているが、すべての商品は、いかに見すばらしく見えようとも、またいかに悪臭を発しようとも、信仰および真相において貨幣であり、つまり心に割礼をうけたユダヤ人である」。<sup>⑪</sup>

マルクスにとってユダヤ主義は資本主義とか利己主義の別名であり、ユダヤ人は高利貸し、我利我利亡者の別名である。マルクスにとって「ユダヤ的な」という形容詞は、「女々しい」、「意気地ない」、または「強慾な」という意味であった。いっぽうエトムント・ジルベルナーの研究<sup>⑫</sup>によると、マルクスにとって、1848年以来、ユダヤ人はたいいてい反動的な金融資本家閥としてえがかれる。マルクスは『新ライン新聞』でも同じ態度をとっているが、彼が1855年から翌年にかけて、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』と『新オーゲー新聞』に匿名でかいたいくつかの論説で、彼はユダヤの金融資本家の権力を語り、反動的な皇帝たち、アレキサンダーもフランツ・ヨーゼフもルイ・ナポレオンもユダヤ資本のあやつり人形にすぎないという見解を展開している。

マルクスがユダヤ嫌いであったから、イエニーも娘たちも反ユダヤ主義にかたむいた。末娘のエリナーだけが、労働運動に献身しだしてから突然にユダヤ人プロレタリアとしての自覚をもつようになった。彼女はイースト・エンドの社会主義者の集会で「私はユダヤ女です」と演説する。彼女はプロレタリア解放運動の一環として、差別され抑圧されているユダヤ人プ

ロレタリアの解放のために献身する。<sup>⑩</sup>

しかしエリナーのこのような政治活動はマルクスの死後のことであった。マルクスのユダヤ嫌いは終生消えなかった。マルクスは父の写真を見せたがらなかった。父が典型的なユダヤ人の人相をしていたからと思われる。マルクスも、警察の手配書によっても、ハインドマンの思い出によっても、みるからにユダヤ人らしい顔をしていた。ユダヤ人であることを卒業したつもりの彼にとって、彼自身の顔はコンプレックスの種になったであろう。彼の人間憎悪と自己憎悪とは、たがいに原因となり結果となって増幅され、彼のユダヤ人憎悪を強めたであろう。たとえば彼は1876年にロンドンで発足した、ユダヤ人労働者の社会革命協会にたいして無関心な態度をよそおった。社会主義運動にかんしては、できるかぎり情報を集めていたマルクスは、この運動のことを当然知っていた。しかし彼にとってはユダヤ人として運動にくわわることは耐えがたい不快であったと思われる。<sup>⑪</sup>

エンゲルスはマルクスが生きていた間は、マルクスと同調して、穏健ながらも反ユダヤ主義者であった。しかしマルクスの死後、彼ははっきりと反ユダヤ主義に反対する。彼は語る、「反ユダヤ主義は、ありのままの情勢のすべてを偽造することになる。反ユダヤ主義は、ユダヤ人をののしるが、ユダヤ人のことを決して知らない。もしもそうでないならば分るはずだ、この英国でもアメリカでも……トルコでも幾千、幾万のユダヤ人プロレタリアが生きていることを、しかもこういうユダヤ人労働者こそ、もっともひどく搾取され、いちばん悲惨であることを」。<sup>⑫</sup>

マルクスの同志でもありライヴァルでもあったフェルディナント・ラッサールもユダヤ嫌いのユダヤ人であった。彼は言う、「ユダヤ人と文士、この2つは大嫌いだ。しかし私は不幸にも、この両方である」。<sup>(100)</sup>このラッサールとマルクスとが、たがいに相手を「ユダヤ人め」とののしるのだ。それぞれの心に、ユダヤ人であるがゆえの苦い思いがつもっている。マルクスのユダヤ嫌いの根深さをみると、マルクスはアウシュヴィッツに大賛成ではないか、とかんぐりたくもなる。こういう「心の地獄」の熱さゆえに、パラダイスすなわち共産主義社会への飢渴はなみはずれて強烈であっただろう。

こういうマルクスが、1回だけ、ユダヤ人にたいして、ユダヤ人としての自分にたいして肯定的な言明をした。彼は伯父のリオン・フィリップスへ書く。「私たちの同族 (Stammgenosse) のベンジャミン・ジズレリー (当時の大英帝国首相) は……」。この伯父の家では、彼は自分のユダヤ性をすこしも気にする必要がなかった。この家にいるときはマルクスのひねくれ根性も眠りこんだのかもしれない。キュンツリの言うように、マルクスは、この資本家の家庭を美化しすぎたのかもしれない。だがとにかく、この家庭では、彼の渴望の対象が、すなわち無階級社会が、部分的にせよ実現されていた。すくなくともマルクスにとっては、そう思えた。彼の手紙。「私は人生において、これ以上の家庭と知りあいになったことは、一度もありません。あなたの子供たちは、みな自立的な性格で、それぞれに獨自性があります。それぞれが特別な精神的な才能をもち、しかも人間的な教養の点では、みな同じように卓越しています」。<sup>(101)</sup>これはキュンツリの言うように、すなおで感動的な文章であり、ゴマスリとは無縁である。

こういうマルクスの性格形成に大きく影響したと思われる社会的背景、家庭状況、事件を拾いあげてみよう。<sup>(102)</sup>

マルクスの父系も母系も<sup>ラビ</sup>律法学者の家系であった。とくに父系はトリールのラビの職を、事実上、世襲していた。父の長兄はトリールに住み、ザール地方全体の上級ラビであった。

ライン州は1808年から1815年までフランス領であったが、それ以後プロイセン領となった。これによってユダヤ人にたいする差別と迫害は強められる雲行きであった。

父は以前からユダヤの信仰から離れていたが、1816年（か翌年）のころルター派の新教徒になった。子供たちは1824年8月に新教徒になったが（このときマルクスは6才）、母だけはユダヤ教をまもり、1825年秋に改宗した。（この期間にマルクスは母の異質性に気づき、違和感をもったと思われる）。カトリックの町で、人口1万5千のトリールで上級ラビの弟が新教徒になったことは注目を集めた。かつ母の改宗は、夫の社会的職業的障害とならぬためと子供の入学のための「偽装転向」であつたらしい。

マルクスは次男であつたが、兄が幼くして死んだので、長男の扱いをうけた。ユダヤ社会は家父長制が強く、将来の家父長となるべき長男は特別扱いをうけた。（ユダヤ教のセクトの中には、長男は家族のものでなく神のものであるという理由で、金を仏って長男を教会から買ひもどす制度もある）。さらに2人の弟が凡庸であり、マルクスとはびぬけて利溲であつたことも加わって、彼は両親から期待され、溺愛された。（こうして彼の「過保護児童」の性格ができる。つまり、わがまま、怒りっぽさ、すぐに反抗的態度をとること等）。

入学すると、旧教徒のブドウ作り農民たちの息子が生徒の大多数をしめており、例外的な新教徒で、かなり生活水準の高い知識階級の子として、仲間はずれにされがちで、孤立と疎外感を味わつたであろう。これはユダヤ人であることによって倍加されたであろうが、ユダヤ人のゆえに、いじめられて喧嘩することも多く、闘争心、攻撃的性格が身についたであろう。かつ学校ではずばぬけた秀才で（普通の子どもよりも2、3年早く高校卒業試験に17才で合格）、この点でも、気楽な友だちができにくく、これによる孤立感と、その裏返しとしての選良意識が強められたであろう。しかも彼は、ほんらいならば、当然ラビになって「選ばれた民」を「神の声」にしたがって導くべき長男であつた。ユダヤ教から離れても、交際範囲内の小社会と家庭とは、いぜんとしてユダヤ人であつて、ユダヤ教的な思考習慣は残る。ラビの「使命感、責任感」は、ユダヤの神が消えると、そのかわりに「人類の福祉」という神聖な目標へと向けられて、この方向での「選良意識」が身につく。しかもこれは学校での成績抜群という通俗的な、だが生徒にとっては重大な裏づけによってささえられていた。

ユダヤ教は世俗のユダヤ人にたいしても、パンのための労働から時間をさいて、ユダヤ経典を学習することを求め、この学習の習慣は、かなり一般的であるという。神のおきてを知る努力を生活の軸とすること、しかもラビはプロとして、それに専従する。この価値感もちつづけたが故に、マルクスは、その「過保護児童」的のわがままもあるが、「人類の福祉」に専念することで、「パンのための労働」を軽蔑し、サボることができたのであろう。

母はオランダのラビの娘であるが、1813年頃、トリールへ来て結婚生活をはじめた。子供たちが改宗して、「より良い」社会の仲間入りをしたとき、母は1人離れて、おどおどと見守っていた。母だけが、「低級な」社会に残つたこと、これは少年マルクスの心に焼きつけられたであろう。母は表向き改宗したあともユダヤ教徒でありつづけた。しかも当時のユダヤ人社会は男尊女卑で、女には低い教育しかあたえなかつた。父は教養面からもトリールの上層の人びとと交ることができたが、同じ家庭に暮しながら、母は身辺のことと神のことしか眼中になく、ドイツ語もたどたどしかつた。少年マルクスは母にたいして愛と軽蔑という2つのアンビバレントな感情をもたざるをえなかつた。この「ネガティブな母親結合」は感情の成長の障害になる。マルクスの感情の幼児性、その自己中心主義、怒りっぽさ、冷たさもここに原因がある。彼は母と感情とを同一視して軽蔑し、知性だけを尊重するようになる。愛情等にたいして冷笑的な態度をとる。肥大した知性と未熟な感情、このアンバランスが彼

を性格づける。さらに父の死後、母との争いが起った。母は彼がラビになるのならどんな犠牲も惜しまなかったかも知れない。しかし息子は不可解な夢想到に酔って、なかなか卒業せず定職につこうともしない。彼女は異国で、何人かの未婚の娘をかかえ、なんとか暮して行かねばならぬ。マルクスからみると、母は彼の「崇高な」努力にたいして盲目であり、慾張りのエゴイストであった。こうして彼は母とユダヤ人とエゴイストとを同一視することになり、ユダヤ人にたいする憎悪と軽蔑が彼の条件反射となる。

マルクスは父を心から尊敬し愛していた。父はリベラルで合理的で寛大で教養があり、社会からも重くみられていた。マルクスの知性尊重は父親崇拜によって強められた。しかしこの父親の弱さが見えてきて、彼はひどいショックをうける。それは1830年。七月革命の報道にラインランドもわきたった。トリールの町でも、しきりに集会が開かれた。父もこの運動に積極的に参加していた。しかし風向きが変った。プロイセン政府の圧迫が始まったのである。父は、すばやく脱落した。弁護士の職業上、政府の出先機関とも接触があり私的なサジェストも受けたのであろう。マルクスが敬愛していた教師が、運動に熱心だったのが理由でクビになり、政府に迎合的だった教師がその代りをつとめた。マルクスが高校をでて大学へ出発するとき、父はその迎合的な教師のところに挨拶に行くように命じた。しかし彼はけっして行かなかった。この事件で彼は、全面的に尊敬していた父の中に、その弱さ、その卑劣なオポチュニズム、そして愚劣さをも確認した。父は進歩と平等を唱えながら、プロイセン愛国者でもあった。これもマルクスの心の傷となった。彼は意識面では、いぜんとして父を尊敬し愛するが、無意識では父を軽蔑し憎悪するようになる。そしてイエニーの父の中に、より強くより立派な「代用父親」を見いだして、全面的に傾倒することになる。

(31. Okt. 1972)

#### 註

- (1) Arnold Künzli :Karl Marx, eine Psychographie;Europa Verlag, Wien, 1966; 896 Seiten. なお、キュンツリが多くを依拠しているブルーメンベルクのマルクス伝(1962)も重要であるが、遠からず邦訳もでるだろう。
- (2) Künzli, S.16.
- (3) Künzli, S.324, Wilhelm Liebknecht. Karl Marx zum Gedächtnis, Nürnberg 1896, S.66.
- (4) Künzli, S.324. a.a.O.S.68. このエピソードは「国民文庫」版の「マルクス回想」には出ていない。同書の底本のディーツ版でもカットされているのであろう。
- (5) Künzli, S.370; E.H.Carr, Karl Marx. A Study in Fanaticism, London 1934, S.138. 石上良平訳, 未来社.
- (6) Künzli, S.368; Dietz, Band 8, S.266f; 大月版第8巻202頁, 大月版のマル・エン全集はディーツ版を底本とし、ディーツ版と同一の巻であり、大月版からディーツ版の該当ページもすぐに分る。
- (7) ここまで筆者訳, 以下は大月版にしたがう。
- (8) Künzli, S 369; Dietz, Band 7, S.568; 大月版, 578頁.
- (9) Künzli, S.371; Dietz, Band 14, S.434. 大月版, 414頁.
- (10) a.a.O., S.435, 415頁.
- (11) a.a.O.S.439,
- (12) こういう糞尿譚好みは精神病理学者にとって性格解明のための興味ぶかい材料であるらしい。

- (13) Künzli, S.315; Dietz, Band 14. 大月版518頁, なお1970年のドイツ版(大月版)も1963年のドイツ版も Nautとなっているが, キュンツリの本では Naut となっている。大月版は信頼できるが, この場合とくに語感が大切なので大月版の訳を採らなかった。der Schurke Schuberth, der Esel Naut, die gemeine Bandeが原語。
- (14) Künzli, S.396. A.Ruge, Briefwechsel und Tagebuchblätter aus den Jahren 1825-1880, Band I, S.380f, Ruge an Fröbel 6.12.1844; Berlin 1886.
- (15) 国民文庫「エンゲルスの追憶」栗原佑訳, 143頁。(アウグスト・ペーベル「ロンドンへのカノッサ参り」)。
- (16) Künzli, S.399. 同上, 152頁。
- (17) Künzli, S.399.
- (18) Künzli, S 399 (Kippsituation)
- (19) キュンツリによれば, 当時イエナ大学だけが, 面接試問なしに学位を発行した。ベルリン大学の, プロイセン政府にたいして迎合的な教授連の試問をマルクスは嫌がったらしい。
- (20) 「科学性を求めない」(nicht den Anspruch auf Wissenschaftlichkeit erhebende Schriften) という表現は適当でない。
- (21) Künzli, S 282f.
- (22) たとえば国民文庫「マルクス回想」の111頁以下のポール・ラファルグの文章参照。ただしキュンツリによれば, こういう性癖も精神病理的な一症状であるらしい。
- (23) Künzli, S 235. エンゲルスからマルクスへの手紙, 1844年10月, 1845年1月。
- (24) Künzli, S 236
- (25) Künzli, S 241. Marx-Engels, Ausgewählte Briefe, Berlin 1935.
- (26) Künzli, S 243.
- (27) Künzli, S 243.
- (28) Künzli, S 92, MEGA I, 1(2), S 208.
- (29) Künzli, S 316.
- (30) Künzli, S 254; 28.12. 1862, an Kugelmann ; Karl Marx : Briefe an Kugelmann, Berlin 1952, S 18.
- (31) Künzli, S 278; 30.8. 1883, Marx / Engels, Briefe an A.Bebel, W.Liebknecht, K.Kautzky und andere, Moskau-Leningrad 1933, S. 308.
- (32) Künzli, S 91; MEGA I, 1(2), S.184.
- (33) Künzli, S 92; a.a.O., S.202.
- (34) Künzli, S 92; a.a.O., S.206.
- (35) Künzli, S 92.
- (36) Künzli, S 92; a.a.O., S.187.
- (37) Künzli, S 92; a.a.O., S.222.
- (38) Künzli, S 93. a.a.O., S. 26.
- (39) ebenda.
- (40) Künzli, S.93. a.a.O., S.228.
- (41) Künzli. S. 95.
- (42) Künzli, S.147f.
- (43) Künzli, S.97. a.a.O., S.220f.
- (44) Künzli, S.99.

- (45) Künzli, S. 110. Entwurf zur Widmung der Dissertation an Ludwig von Westphalen. MEGA I, 1(1) S 6f.
- (46) Künzli 335f. Familienbriefe von Karl Marx. In: Annali. Istituto Giangiacomo Feltrinelli, Milano, anno primo, 1958.
- (47) Künzli, S.337. Marx an Engels, 1. 8. 1856.
- (48) Künzli, S. 387. Gustav Mayer : Friedrich Engels II, Berlin 1920. S.356. マイヤーは、リヤザノフがベルンシュタインから聞いた話として、マルクス・エンゲルスの往復書簡の中から、エンゲルスを傷つけるものを、マルクスの娘たちが処分した、と伝えている。
- (49) Künzli, S.385. Wie wirst Du es nun mit Deinem establishment einrichten ? 大月版第30巻、250頁では「ところでこれから君の家事はどうやってゆくつもりなのか」と訳してある。
- (50) Künzli, S. 385. Marx an Engels, 8.1. 1863. この establishment のなかには、とうぜんプロレタリアの娘で内縁関係のメリー・バーンズははいっていない。かつ、マルクスが生活難を訴えるのは、金を送れということの意味する。エンゲルスが途方にくれているのに。
- (51) Laut Ausgabe Dietz, Berlin 1950. 大月版第30巻252頁の註1, 参照。
- (52) Engels an Marx, 13.1. 1863. 同上251頁。
- (53) Marx an Engels 24.1. 1863. 同上252頁。
- (54) Künzli, S. 384f.
- (55) 国民文庫「エンゲルスの追憶」, 59頁(メーリング), 125頁と128頁(カウツキー)。
- (56) Künzli, S. 388f. 17.9. 1878. Familienbrief von Karl Marx. In Annali. S. 202.
- (57) Künzli, S. 364f.
- (58) Künzli, S. 304f.
- (59) Künzli, S. 306.
- (60) Künzli, S. 307. Dietz, 1, S 340.
- (61) Künzli, S. 308. 大月版第13巻, 638頁。
- (62) a.a.O.
- (63) Künzli, S. 300. 大月版第28巻66頁。
- (64) Künzli, S. 95. MEGA I 1(2) S.190f.
- (65) Künzli, S.95f. a.a.O. S.227. 金づかいが投げやりで、だらしがないというだけで、そんなに金があるものだろうか、キュンツリはマルクスの信条、性格から見て、吉原通いの可能性を、まったく無視している。享樂的性格でなかったことはたしかだが、世には、うっきよくした心が原因のデカダンスもあるのではなからうか。
- (66) Künzli, S. 96. W.Blumenberg : Karl Marx, Hamburg, 1962, S.226.
- (67) Künzli, S. 115. MEGA I 1(2), S 231.
- (68) Künzli, S, 141f. フィリップス一家とマルクスとの交際を示す手紙は、1956年ブルーメンベルクによって、はじめて世にだされた。W.Blumenberg: Ein unbekanntes Kapitel aus Marx Leben. In: International Review of Social Hystory, 1. Jahrgang, Nr. 1. 1956.
- (69) Künzli, S 88. MEGA I 1(2), S. 222.
- (70) Künzli, S. 90. a.a.O. S. 198.
- (71) Künzli, S.118. MEGA I, 1(2), S. 242ff.
- (72) Künzli, S.120. a.a.O. S. 307.
- (73) Künzli, S. 317.

- (74) Künzli, S.234. Auguste Cornu: Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werke. Band II. S.10f.
- (75) Künzli, S.235. Cornu II. a.a.O.
- (76) Künzli, S.262,3.S.267. In:Franz Mehring:Neue Beiträge zur Biographie von Karl Marx. Die neue Zeit. 25 Jahrgang, 2.Band, 1907.
- (77) Künzli, S. 249.
- (78) Künzli, S.268.
- (79) Künzli, S. 140. Gustav Mayer:Neue Beiträge zur Biographie von Karl Marx. Archiv für die Geschichte des Sozialismus und Arbeiterbewegung, 10. Jahrgang, 1.Heft 1921,S.57f.
- (80) Künzli, S 316. Luise Dornemann:Jenny Marx, Weimar 1955.
- (81) Künzli, S.318. 27. 7. 1850. In:Franz Mehring:Neue Beiträge, a.a.O.
- (82) Künzli, a.a.O. 大月版第27巻478頁f.
- (83) Künzli, S.318. 21.6. 1854.
- (84) a.a.O. 30.3.1855.
- (85) a.a.O. 30.10.1856; 18.3.1857;9.4.1857.
- (86) a.a.O. S.319. 15.7.1858.
- (87) Künzli, S.334. Eduard Bernstein:Was Eleanor Marx in den Tod trieb. In:Die Neue Zeit, XVI. Jahrgang, II Band.
- (88) Künzli, S.328f. Blumenberg, Marx, rowohlt, Bildbiographie, S.115f. デュラン「人間マルクス」、大塚幸雄訳、岩波新書、93頁以降。「シュピーゲル」の1972年10月25日号にも、フレッディにかんする最新の調査結果がでている。ただしフレッディがマルクスの私生児という問題は確定的とは言えない。「ルイーゼの手紙」が後人の偽作であるとか、ルイーゼの嘘とか、エンゲルスのもうろくとかの可能性もある。エリナーからフレッディへの手紙は「ルイーゼの手紙」の存在によってのみ、この件の傍証となる。「赤旗」の1972年1月31日号には土屋保男氏がマルクスのぬれぎぬ説を書いている。
- (89) Künzli, S.203. MEGA I, 1(2), S.307.
- (90) Künzli, S.213. 10.5. 1861.
- (91) a.a.O. 25.8.1879.
- (92) Künzli, S.205. Eleonor Sterling:Er ist wie Du. Aus der Frühgeschichte des Antisemitismus in Deutschland 1815 bis 1850, München 1956, S.39.
- (93) a.a.O. Simon Dubnow:Weltgeschichte des jüdischen Volkes, Band III, S.73.
- (94) Künzli, S.207. Kapital I. S.207. 青本文庫(1), 141頁, 長谷部文雄訳。
- (95) a.a.O. Kapital I, S.162. 同上(2), 296頁。
- (96) Künzli, S.208. Edmund Silberner:Sozialisten zur Judenfrage, Berlin, 1962. S.128f.
- (97) Künzli, S.481f.
- (98) Künzli, S.208f. Silberner, S.139.
- (99) Künzli, S.210f. Zitiert in Victor Adler: Aufsätze, Reden und Briefe, S.8.
- (100) Künzli, S.200. Zitiert bei Hermann Oncken:Lassalle, Berlin 1923,S.17
- (101) Künzli, S.221. 6.5. 1861. Zitiert bei Blumenberg, S. 86.
- (102) 以下キュンツリの材料と推論とを要約したものであるが出典は省略する。なおキュンツリの本領ともいうべき、「人間」と「思想」と「科学」とをからませた部分については別の機会にゆずる。